平成 29 年度　移動展「下田原貝塚出土品展」

関連講座 in 波照間島

下田原貝塚の調査について

【日 時】平成 29 年 9 月 16 日 (土) 19：00 ～

【会 場】波照間農村集落センター

【主 催】沖縄県立埋蔵文化財センター

【共 催】竹富町教育委員会

竹富町波照間島の下田原貝塚ついて

―昭和 59・60 年度の発掘調査成果を中心に―

金城亀信（沖縄県立埋蔵文化財センター 所長）

１．はじめに

先島（宮古・八重山の両諸島）の先史時代を代表する下田原貝塚（第 1 図）は、先島の先史時代を解明する上で欠くことのできない重要な遺跡である。

下田原貝塚は八重山郡竹富町の波照間島に所在し、昭和 29（1954）年に金関丈夫・国分直一・多和田真淳氏らによって発見（註 1）され、昭和 31（1956）年 10 月 19 日付けで、当時の琉球政府文化財保護委員会によって史跡に指定（註 2）されている。

昭和 29（1954）年に金関丈夫・国分直一・多和田真淳氏らによって戦後、初めての発掘調査が下田原貝塚（註 1）で実施された。

次に昭和 34（1959）年の早稲田大学八重山学術調査団による発掘調査（波照間島下田原貝塚、西表島仲間第一貝塚・仲間第二貝塚、西表平西島平西貝塚、石垣島山原貝塚）が実施され、その成果は昭和 35（1960）年に『沖縄 八重山』（註 3）で報告されている。

三回目の発掘調査は、沖縄県教育委員会が土地改良計画に伴う遺跡の範囲確認を目的として行ったもので、昭和 58 ～ 60（1983 ～ 1985）年度の三ヵ年間に亘って下田原貝塚と大泊浜貝塚（第 2 図）で実施した（註 4）。このときは、昭和 58 年度に大泊浜貝塚、昭和 59・60 年度に下田原貝塚の調査をそれぞれ実施している。

昭和 59・60 年度の発掘調査で出土した土器や石器などを含む遺物 294 点は、平成 23（2011）年 12 月 13 日付けで、沖縄県指定有形文化財（考古資料）に指定（註 5）された。

２．下田原貝塚に関する考古学研究小史

下田原貝塚に関係する主な事項を下記に記す。

①昭和 29（1954）年：金関丈夫・国分直一・多和田真淳氏らによって下田原貝塚が発見（註 1）された。

②昭和 31（1956）年：多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」（註 6）の中で、下田原貝塚について、「・・西表島仲間第二貝塚のものと同一のものと断定する。・・先島に於ける最大最古の貝塚で、これが拠点となり先島地方の後代に於ける川平貝塚系の外耳土器に発展・・。」と記している。併せて「琉球貝塚の編年表」を掲載し、「下田原・仲間第二」を「仲間第一・西表大原」よりも古く位置付けている。

③昭和 34（1959）年：滝口宏・西村正衛らによる早稲田大学八重山学術調査団の発掘調査が実施され、1960 年に刊行された報告書において、いわゆる『早稲田編年』（第 1 表）が提示（註 3）される。

④昭和 39（1964）年：国分直一・金関丈夫・多和田真淳・永井昌文「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『水産大学校研究報告 人文科学篇』第 9 号 1964 年（1954 年に行われた発掘調査の成果を報告）が刊行（註 1）された。

⑤昭和 44（1969）年：リチャード・ピアソンの編年で、下田原土器を「Shimotabaru Type（下田原式）」（註 7）と初めて呼称する。

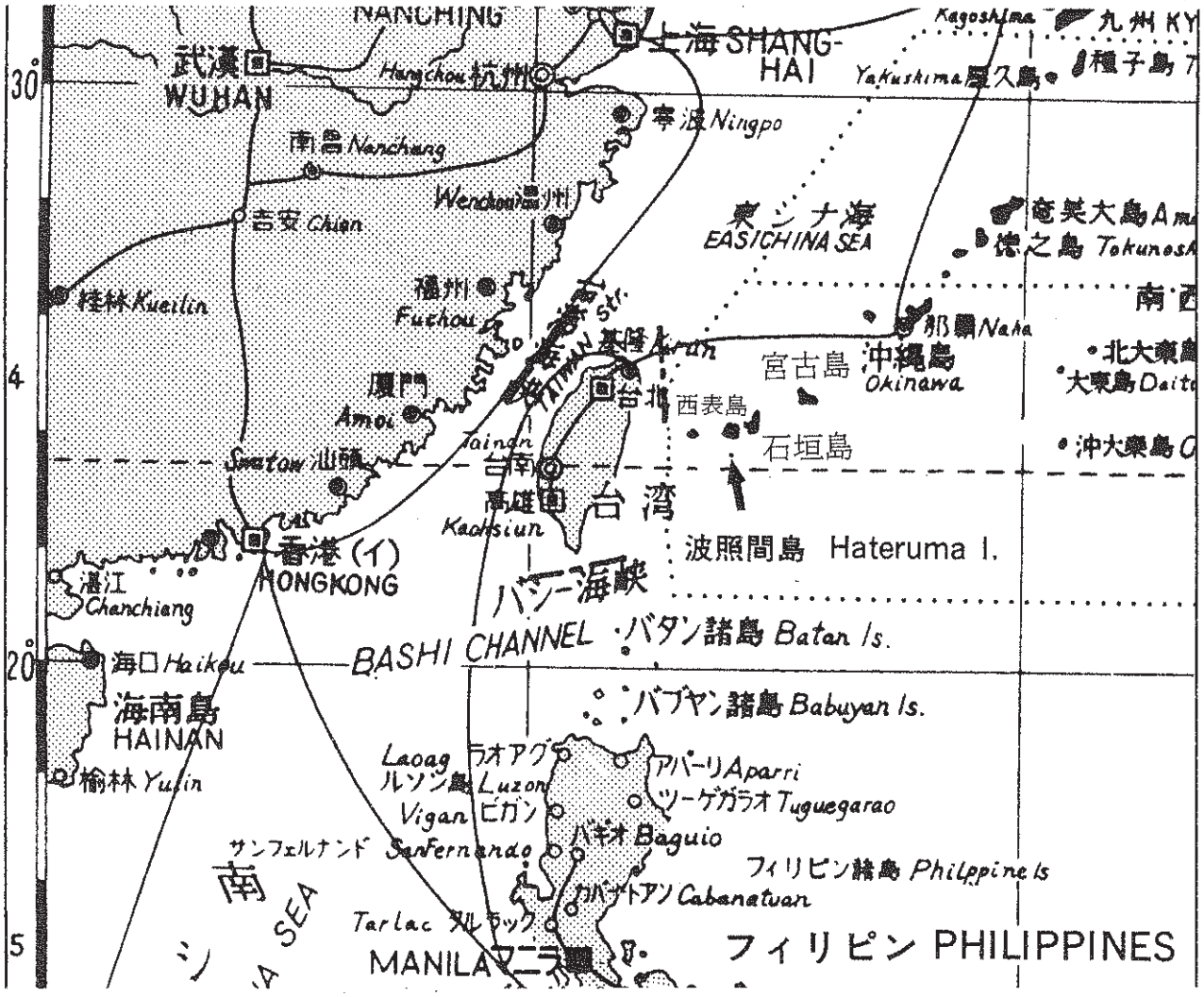
⑥昭和 47（1972）年：国分直一氏は、その著書『南島先史時代の研究』（註 8）の中で、早稲田編年を基本にして、文化期を 4 つに分けて国分直一編年を提示し、日本語表記による「下田原式土器」の型式名を初めて提唱する。

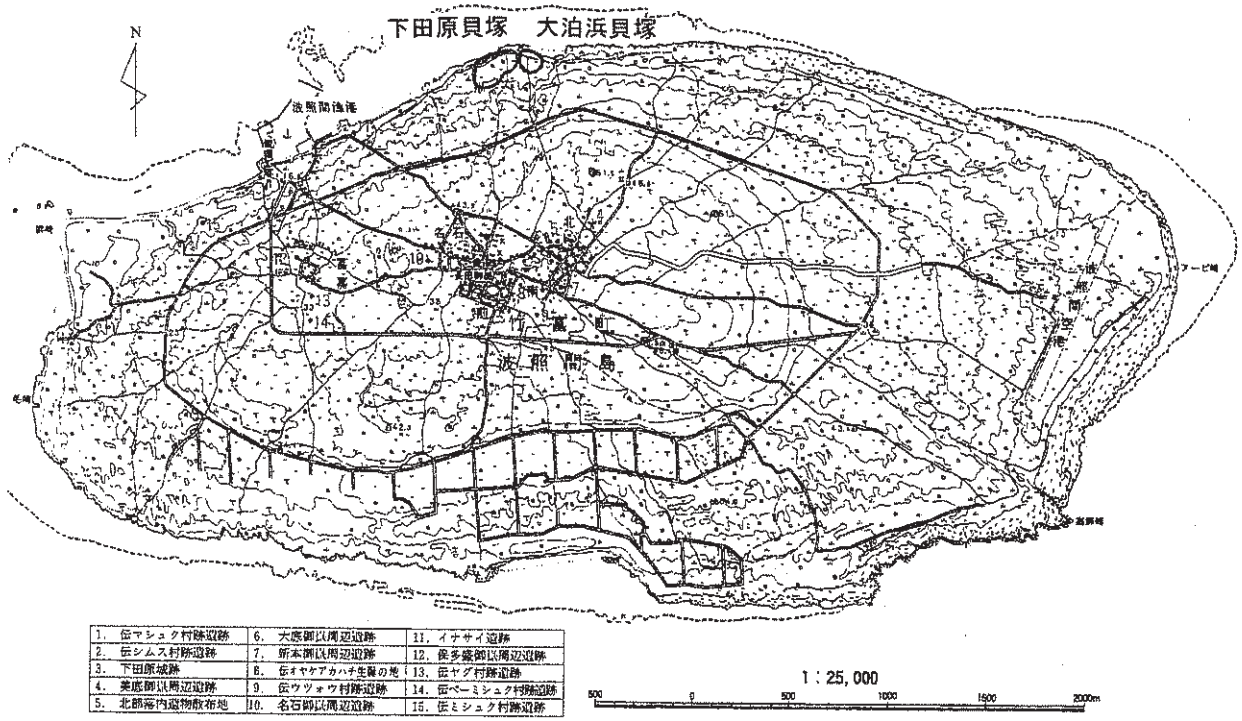
⑦昭和 49（1974）年：三島 格は、早稲田編年と国分直一の編年を補修し、三島編年（註 9）を提示。

⑧昭和 51（1976）年：早稲田編年を基本にして、當眞嗣一が編年（註 10）を提示。

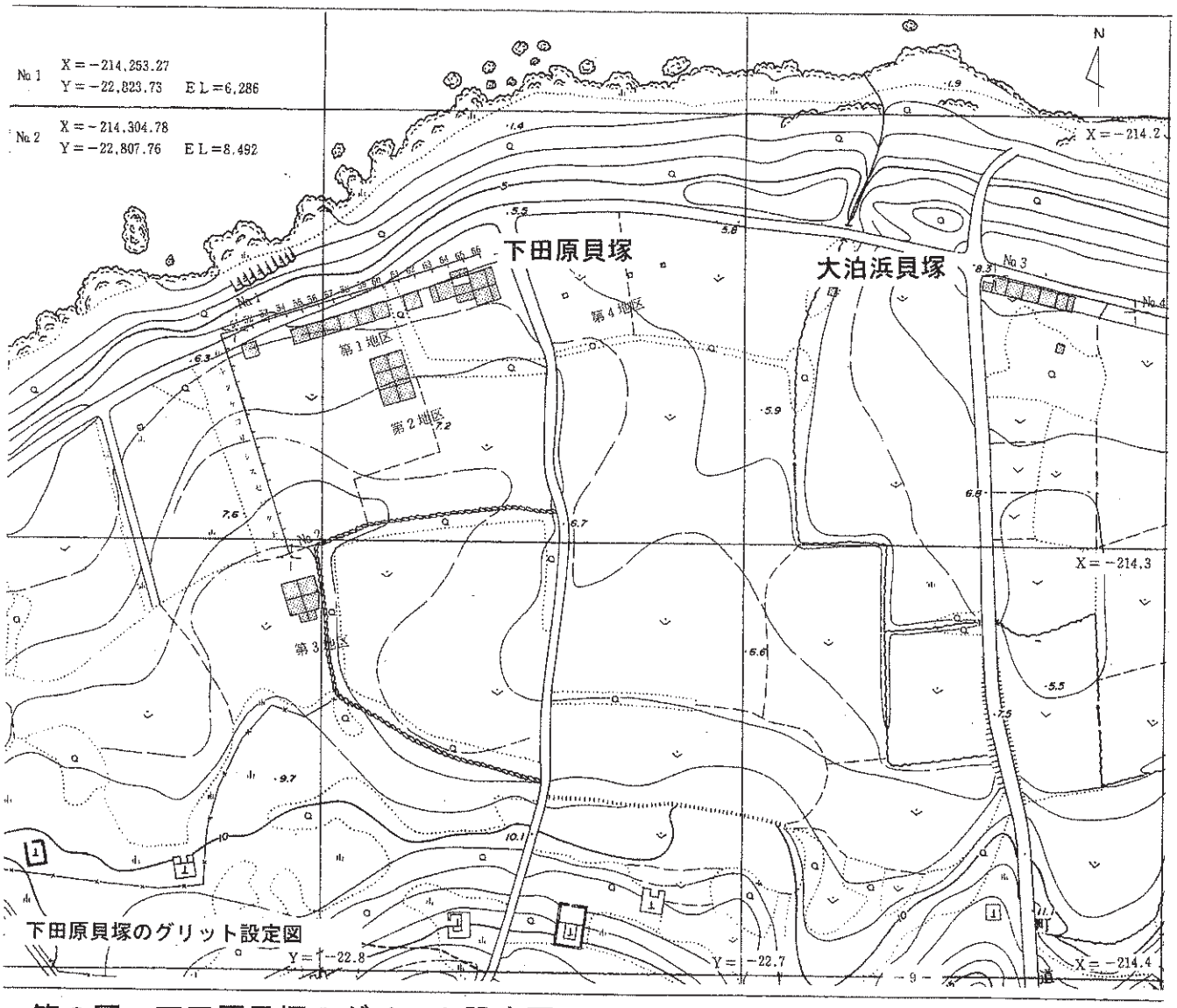
⑨昭和 53（1978）年：沖縄県教育委員会による石垣島大田原遺跡（第二期：下田原式土器）・神田貝塚（第一期：無土器）の発掘調査で、早稲田編年の第一期（無土器）と第二期（下田原式土器）が逆転（註 11）する可能性が高くなった。

⑩昭和 58 ～ 60（1983 ～ 85）年：沖縄県教育委員会による土地改良計画に伴う大泊浜貝塚と下田原貝塚の範囲確認調査で、下田原貝塚の層の上に、無土器の大泊浜貝塚の層が堆積していることを確認した。





第１図　波照間島の位置と波照間島の遺跡分布図



第２図　下田原貝塚のグリット設定図

編年	遺跡名	遺物
第一期	仲間第一（西表）	石器（磨製・半磨製）
第二期	下田原（波照間） 仲間第二（西表） 大原川付近小貝塚（西表）	土器（小電）・石器 貝器・骨角器
第三期	山原（石垣） 平西（西表） フルロウ山（小浜） フルスト原（石垣） 波照間貝塚群	土器（外耳多貴・磁器その他） 鉄製品・石器・貝器・骨角器
第四期	大原（西表） 野彦（〃） 川平第一（石垣） 川平第二（〃） 川平第三（〃） 名蔵川（〃） 黒島	土器（パナレ系？・磁器その他）鉄製品

＿＿線は各遺跡に共通するもの

第１表　滝口 宏編の編年
『早稲田編年』（1960年７月）

	編年		土器	石斧・貝斧	陶磁器・開元通寶	立地・石垣	主な遺跡
先史時代	下田原期	（参考） 14C3970±95 ～ 14C3580±65	下田原式土器	石斧	無し	砂丘後背の微高地	下田原 仲間第二 大田原
	無土器期	（参考） 14C1770±70 ～ 12世紀前半	無し	石斧 貝斧	開元通寶 中国陶磁器（北宋末）が僅かに出土 徳之島カムィ窯須恵器	砂丘	仲間第一 大泊浜 崎枝赤崎
歴（原）史時代	新里村期	12世紀 ～ 13世紀	新里村式土器 ピロースク式土器	石斧僅か	中国陶磁器（北宋末～南宋）が少量出土	丘陵上や平野 石垣無し	新里村東 ピロースクの２・３層
	中森期	13世紀末 ～ 17世紀初	中森式土器	無し	中国陶磁器（元～明）が大量出土	丘陵上や平野 石垣が登場	鳥間中森 新里村西
	パナリ期	17世紀 ～ 19世紀	パナリ焼	無し	沖田・壺屋陶器や八重山陶器が出土	近世の廃村や現村落	新城島

第２表　金武正紀・阿利直治・金城亀信の編年
〈第２次〉（1994年12月）

放射性炭素年代測定の結果、下田原貝塚（第Ⅲ層出土のシャコガイおよび木炭による年代測定）が約3,600年前、大泊貝塚（第6層、第10層、第11層出土の木炭）は約1,300～1,500年前であることが確認（註4）された。

⑪昭和64（1989）年:安里嗣淳「南琉球圏（宮古･八重山諸島）先史時代の編年」（註12）を発表〔前期（下田原期）と後期（無土器期）の二つの時期に区分)〕する。

⑫昭和64～平成6（1989～1994）年：石垣島の大田原遺跡・神田貝塚と波照間島の下田原貝塚・大泊浜貝塚の発掘担当者であった金武正紀らが編年（第2表）を提示（註13）した。

3．発掘調査の成果

昭和59・60（1984・1985）年度の二ヵ年間に亘って沖縄県教育委員会が実施した下田原貝塚の発掘調査で検出された遺構や主な出土遺物（註4）について、以下にその概略を記す。

1）検出された遺構

（1）柱穴（土壙を含む）

柱穴は、第1地区で23基（第3図)、第2地区で20基（第4図）の計43基が確認されているが、住居プランは把握できなかった。大田原遺跡からは竪穴遺構（註11・14）が報告されているが、下田原貝塚の住居は、竪穴式の住居ではなく平地式の住居であったことが考えられる。互いに関係のある2つの柱穴と結びつくような第3・第4の柱穴が検出できなかったことから、2つの柱穴で建物が立つことも想定されるようである。類例として赤沢 威氏は、オーストラリアの原住民Wik－Monkan族が、2本の柱を立ててテント小屋状の住居をつくっている図（イギリスの人類学者ThomSonが1939年に作成）を紹介（註15）している。本遺跡において、仮に簡素な住居だったとすれば、2本柱の平地住居跡の可能性があり得るが、現段階では類例資料がなく判然としない。

（2）炉跡

第2地区で6基（第4図）の炉跡が検出されたが、炉の設置箇所については屋内なのか、屋外なのかは、判然としなかった。

（3）溝状遺構

遺跡の北側にあたる第1地区（第3図）から東西に方向に延びる構状遺構が検出されている。溝の規模は、全長36 m、幅約80cm、深さ5～15cmを測った。地形からすると溝は西側に10 m程度延びていく可能性が高かった。当該期における、このような排水機能を持つ遺構は先島のみならず県内遺跡でも他に報告例がない。

2）主要な出土遺物

昭和59・60（1984・1985）年度の二ヵ年間実施した下田原貝塚の発掘調査における特徴的な出土遺物について概略を記す。

（1）土器（第5図）

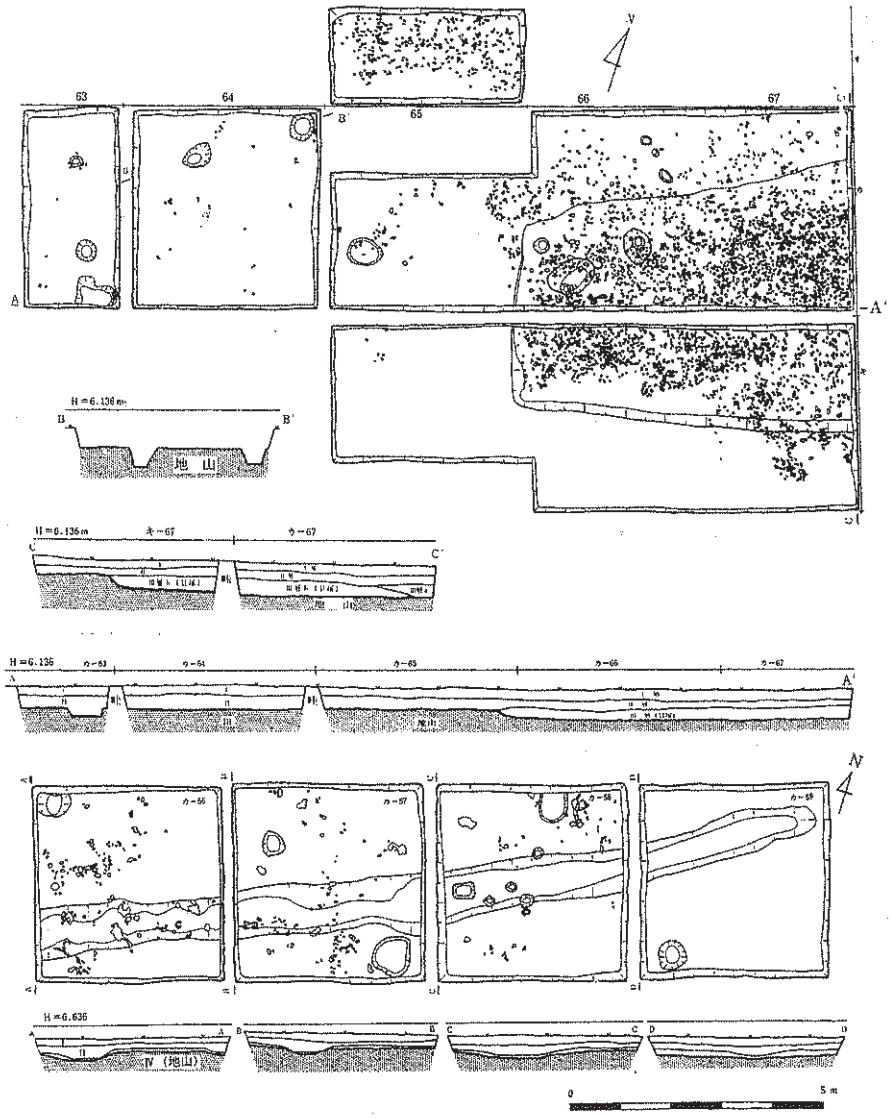
検出された土器（口縁部64個、把手13個、底部11個、胴部858個、合計946個）は、すべて下田原式土器であった。基本的な器形（第5図3）は、丸底に近い平底で、胴部が脹らみ、胴部から口縁部へと内彎し、最大径が胴部にある内彎形の浅鉢である。土器の大きさには、バリエーションがあり、口径が10cm前後の小型から、25cm前後の大型のものがある。

A）胴部器壁の分類：

胴部器壁の厚さ11mm以上の厚手土器をA群、10mm以下の薄手土器がB群。A群（厚手土器）が約90％（775個)、B群（薄手土器）は約10％（83個）とA群（厚手土器）が圧倒的に多い。

B）口縁形態の分類：

第Ⅰ類：無頸の内彎形口縁（a・bの二種類に細分。第5図2)、第Ⅱ類：有頸の外反形口縁（a～dの四種類に細分。同図1・3)、第Ⅲ類：無頸の直口形口縁（同図4・5)。以上の三類に分類されている。



第３図 第1地区の遺構

（上：第１地区　東側の貝塚と柱穴遺構）
（下：第１地区　西側の溝状遺構）

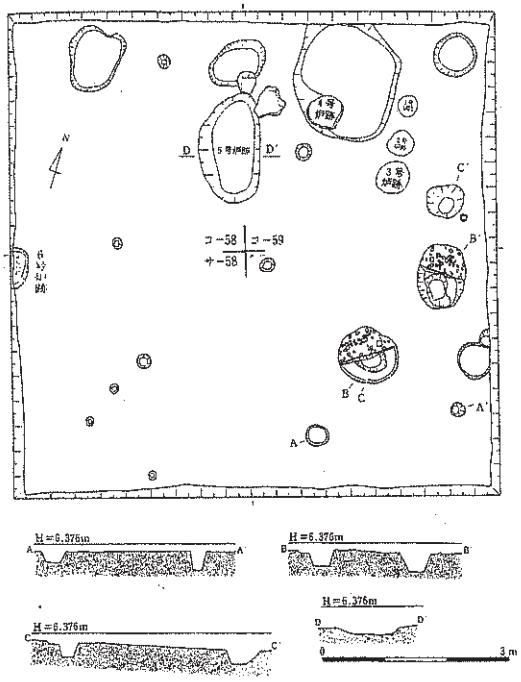
(2) 第２地区

ケ－58・59、コ－58・59、サ－58・59の６グリッドで、層序は第３図上のとおりである。この一帯は、さとうきびが最も成育していたので、層が厚いと予測し、グリッドを設定した。発掘の結果、本遺跡の中心部分であることが確認された。層が厚く、遺物が多く、遺構も集中している地点である。

第Ⅰ層　暗褐色土で、層厚が20～25cm。耕作で攪乱されている。土器、石器などがかなり表面採集された。

第Ⅱ層　黒色土で、層厚が５～15cm。貝殻や礫は少ないが、土が黒く、他の地区の第Ⅱ層とは様相が違う。土器片が、多いグリッドでは70個前後もあり、他の地区の第Ⅱ層よりははるかに多い。なお、サ－59東壁断面図で第Ⅲ・Ⅳ層を切っているのは柱穴で、第Ⅱ層に対応する遺構の一部と考えられる。柱穴より南へ約1.7ｍの所に鍋底状の凹みが見られるが、そこに第16図20の下田原式土器が横になって埋まっていた。

第Ⅲ層　黒褐色土で、層厚が15～20cm。貝殻・獣魚骨・礫などが多量に堆積している貝塚である。



第４図 第２地区の柱穴・炉跡などの遺構

C）土器収束：報告書では①～⑨までの事項を掲載。主な事項を抜粋し、番号は振り直した。
①口縁部の形態によって、第Ⅰ類（無頸の内彎形口縁）、第Ⅱ類（有頸の外反形口縁）、第Ⅲ類（無頸の直口形口縁）に分類した。なかでも第Ⅱ類が最も多く、下田原式土器の盛興期と考えられる。
②把手は横断面、縦断面とも三角形状を呈する、いわゆる牛角状把手が主体で、僅かに横長の把手も共伴している。口縁部から把手まで付いている土器が検出されたために、これまで不明であった把手の位置や傾きなどがある程度解明された。
③有紋土器は細沈線紋が１点検出されただけで、爪形紋は１点も検出されなかった。大田原遺跡では第Ⅰ類に爪形紋が多いことから、大田原遺跡との間にいくらかの時間差が考えられるが、その解決は今後の発掘成果に期待したい。
④層位的に第Ⅰ類ａ・ｂ（第５図２）、第Ⅱ類ａ・ｂ（同図１・３）はほとんど第Ⅳ層・Ⅲ 層の出土で、第Ⅱ類ｃ－ｄ、第Ⅲ類（同図４・５）は第Ⅲ・Ⅱ層でほぼ同じぐらい出土している。ここで若干の時間差をみることができるが、今回は問題提起にとどめておきたい。

（２）石器（第６図～第９図）

石器の総数は 207 点が得られた。種類は、石斧（未製品･石核石器･完成品･破損品･再利用･転用を含む）161 点（約 77％）､石製利器 16 点（約 7.7％）､磨石（磨石の兼用品を含む）12 点（約 6％）､凹石１点（約 0.5％）、石皿２点（約１％）、砥石 11 点（約 5.3％）、敲き石３点（約 1.5％）、円盤形石器（第９図 26）１点（約 0.5％）の８種類が確認されているが、この中から特徴的な石器を挙げる。

A）石斧：半磨製および局部磨製が主で、磨製は少ない（第６図１～６、第７図７～ 12、第８図 13・14）。刃部の側面形態（形状の窺える破片を含む 77 点）から両刃は７点（約 10％）､片刃が 70 点（約 90％）と、片刃の石斧が多い。
刃部の平面形態などから第Ⅰ群（24 点）・第Ⅱ群（48 点）・第Ⅲ群（28 点）・第Ⅳ群（３点）までの四つに分類し、更に刃部の幅から小型（1.5cm ～ 2.9cm）・中型（3.0cm ～ 4.9cm）・大型（5.0cm ～ 6.9cm の三つのタイプに細分した（第３表～第７表）。
以上の石斧の中で、第Ⅲ群は、国分直一氏が命名した「有稜石器」（第７図 11･12）や「割竹型石器」（同図９･10）（註 8）に属するグループが主流であった。その他、国分 直一氏が命名した「ビラ型石器」･「両端刃石器」（第６図５）（註 8）は、第Ⅰ群・ 第Ⅱ群の短冊形石斧に含まれている。また、第Ⅱ群には第７図 ７のような「有肩石斧」もみられる。
次に第７図８については、報告書刊行後に国立奈良文化財研究所の佐原 真氏に資料を実見していただく機会を得た。佐原氏によると両側面を擦り切って製作された石斧であるとの教示を頂いた。県内の遺跡から擦り切り技法による石斧の報告例は他にはない。擦り切り技法の系譜については判然としないが、可能性として台湾・中国、フィリピンなどの地域が考えられるところである。

B）石核石器：第８図 15 の一例のみ出土していて、東南アジアやフィリピンなどから出土するホアビニアン型に近似する石器で、これまで報告例がなかった資料である。当該資料は、フィリピン出土（註 16）のホアビニアンⅡ型に形態が近似するが、今後の研究に委ねられるところである。

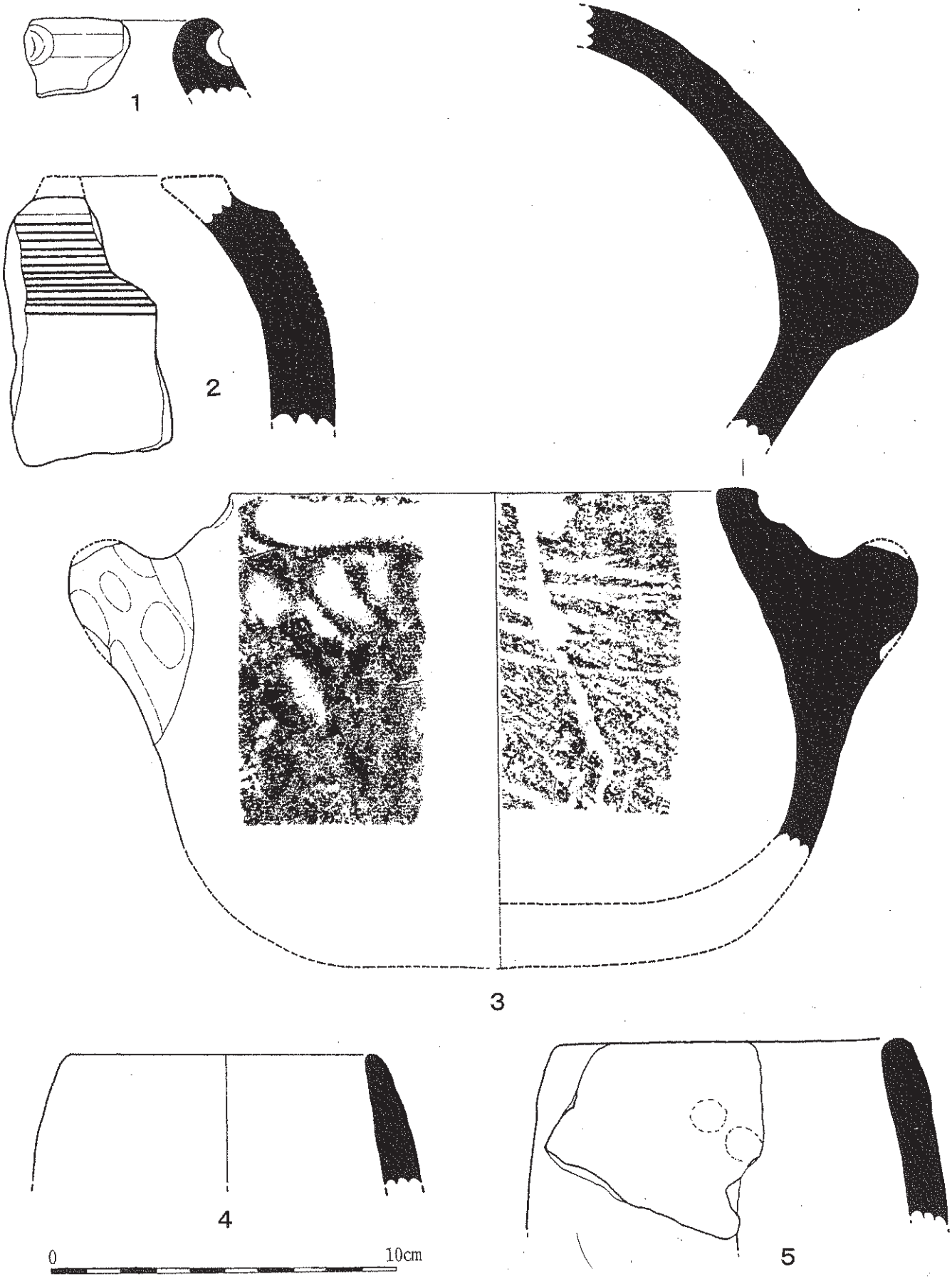
C）石製利器（尖頭器、鑿状利器、石錐）

a. 尖頭器（第８図 16 ～ 18）：小型の尖頭器が４点出土していて、細身（長さ 2.4 ～ 6 cm、幅４～６mm､厚さ３～４mm）である。この中で両端の先端を鋭く尖らせているものが１点（同図 16）得られている。

b．鑿状利器（同図 19、第９図 20・22）：４点が出土していて、いずれも先端部を鑿状に刃を付けたものであるが、その内、１点（同図 20）は下端は錐状に上端が鑿状に製作されていることから、錐と鑿の二種類の機能を兼ね備えている。

c．石錐（第９図 21・23 ～ 25）：７点が得られている。

以上の石製利器（尖頭器、鑿状利器、石錐）で、一部の利器については国分直一氏らによる下田原貝塚の発掘調査（註 1）で得られている。この種の利器は、無土器遺跡の与那国島トゥグル浜遺跡（註 17）や石垣島ピューシタ河口遺跡（註 18）で出土例があり、改めて下田原期まで遡ることが再確認できた。



第５図　下田原式土器 A群土器（第Ⅰ類b：２、第Ⅱ類a：１・３）
B群土器（第Ⅲ類：４・５）

第３表　石斧群別の平面形態

群 / 平面形態	Ⅰ群			Ⅱ群			Ⅲ群			Ⅳ群			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
A. 短冊形	1	1			1		2						3	2	
B. 細身の短冊形		1												1	
C. バチ形		3			3	3								6	3
D. 逆バチ形		3	1	1	2		3			3			7	5	1
E. 不定形	2			2	3		1						5	3	
計	3	8	1	3	9	3	6			3			15	17	4
	12			15			6			3			36		

注．模式図は典型的なものを図化した。Ⅳ群は残存の形態から分類した。

第４表　石斧刃部破片群別の平面形態

群 / 平面形態	Ⅰ群			Ⅱ群			Ⅲ群			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
A・短冊形				1	2	2	1			2	2	2
B・細身の短冊形							1			1		
C・バチ形	1					1				1		1
D・逆バチ形	3			3	4	2	7			13	4	2
E・不定形					5		2			2	5	
A・Bの不明	1									1		
A～Eの不明	3				2	1				3	2	1
計	8			4	13	6	11			23	13	6
	8			23			11			42		

第５表　石斧群別の出土状況

刃部平面の模式図 ＼ 層序	I			II			III			IV			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
表採	1 (3)	2		3 (2)	6 (4)	(2)	4 (4)			(1)			8 (10)	8 (4)	(2)
第Ⅰ層	2 (1)	3		1 (1)	1 (2)		2(4)						5 (6)	4 (2)	
第Ⅱ層	1 (1)	3	1	1 (1)	4 (4)	3 (2)	1 (1)			(1)			3 (4)	7 (4)	4 (2)
第Ⅲ層	1 (3)	2		1	4 (3)	1 (2)	(2)			(1)			2 (6)	6 (3)	1 (2)
第Ⅳ層															
計	5 (8)	10	1	6 (4)	15(13)	4 (6)	7 (11)			(3)			18(26)	25(13)	5 (6)
	16(8)			25 (23)			7 (11)			(3)			48 (45)		

注.( )内は刃部の破片資料。

第６表　石斧群別の刃部側面形態

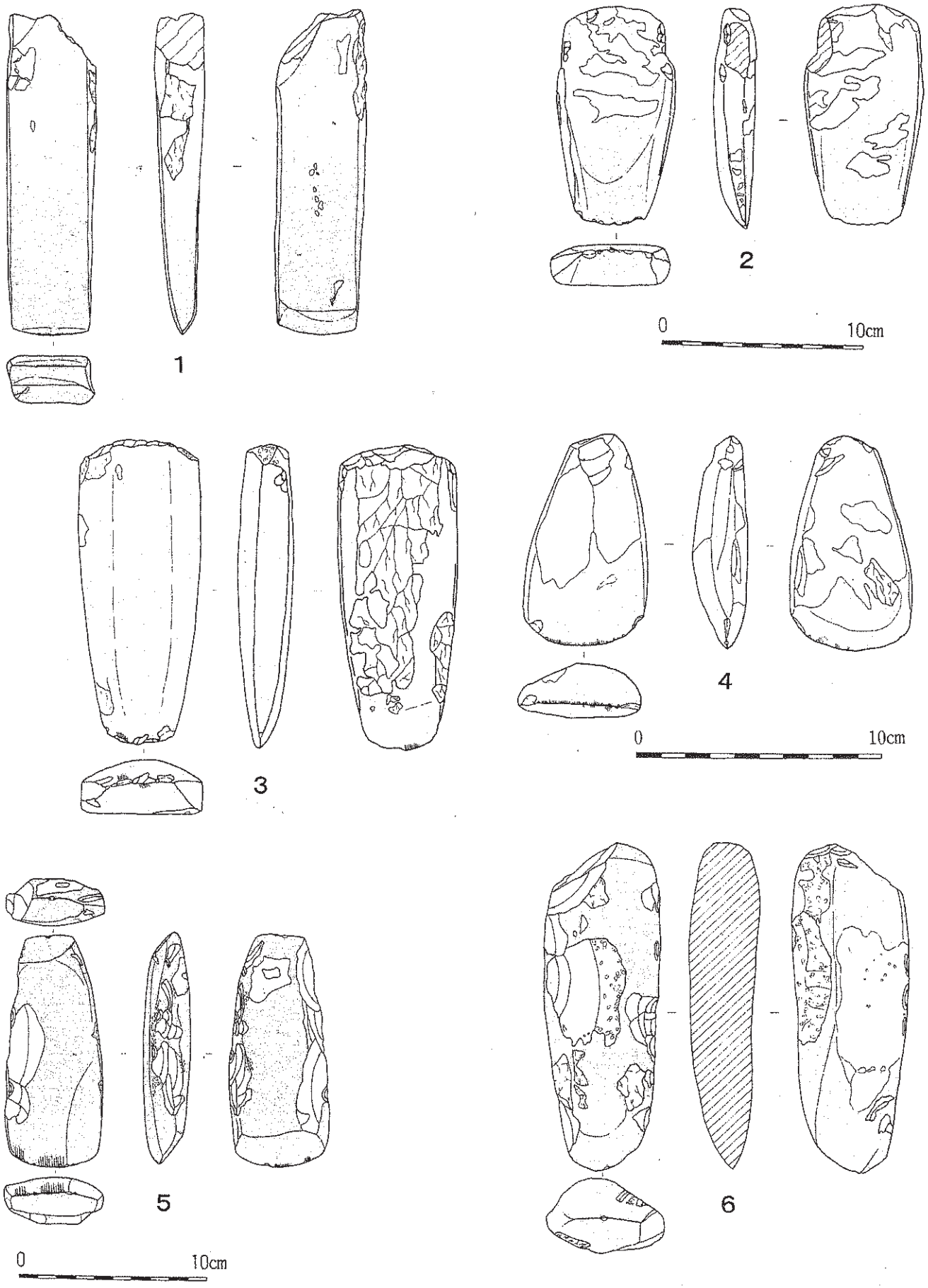
刃部側面形態 ＼ 群	I群			II群			III群			IV群			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
イ		1		1	2	1							1	3	1
ロ	2	1		2	5		2			1			7	6	
ハ	1	6		3	6	2	3			1			8	12	2
破損品						1									1
計	3	8		6	13	4	5			2			16	21	4
	11			23			5			2			41		

注．模式図は典型的なものを図化した。また、明確なものを分類の対象とした。

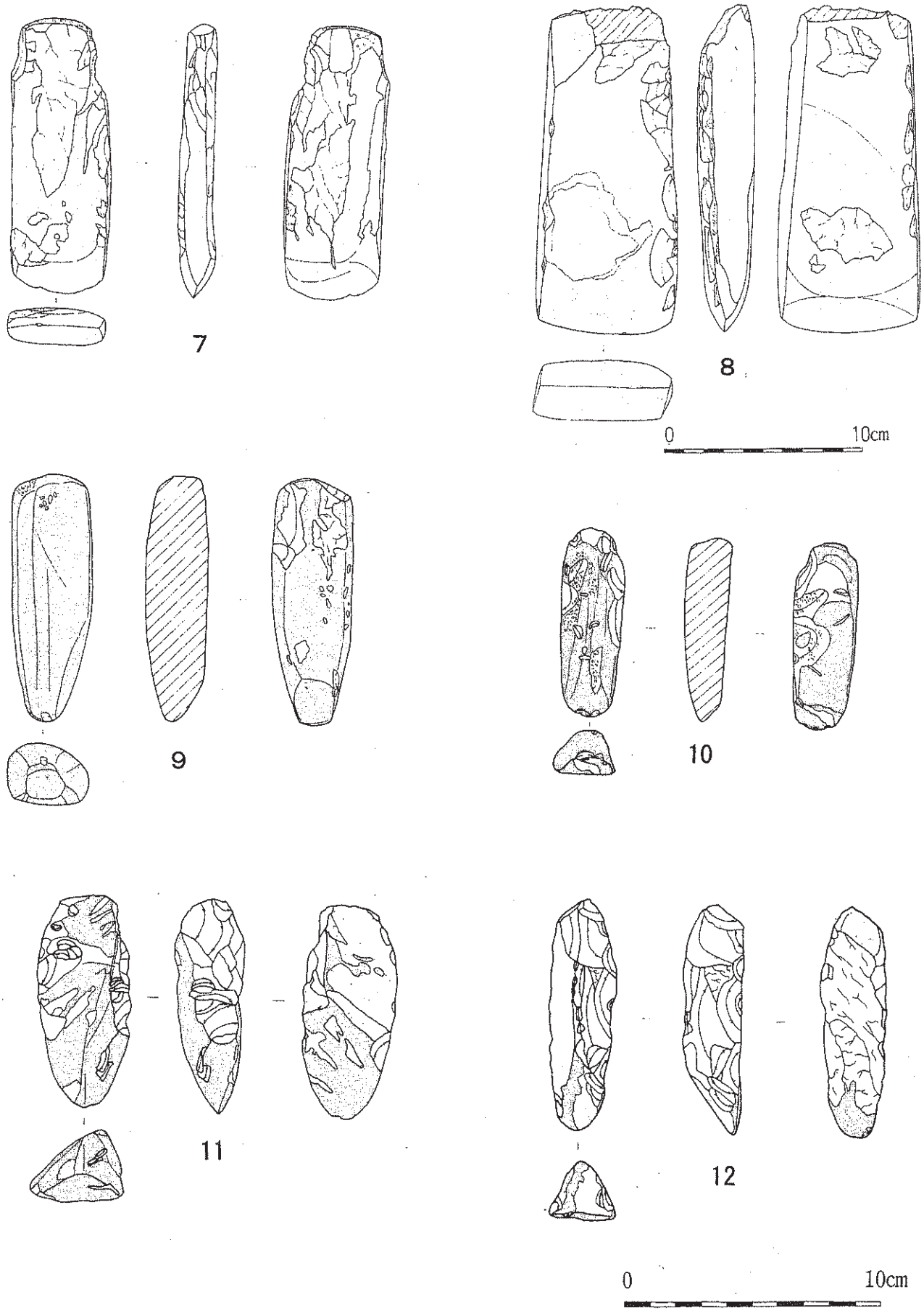
第７表　石斧刃部破片群別の側面形態

刃部側面形態 ＼ 群	I群			II群			III群			計		
	小	中	大	小	中	大	小	中	大	小	中	大
イ				2			1			3		
ロ	2			1	3	1				3	3	1
ハ	5			1	9	3	10			16	9	3
破損品	1				1					1	1	
計	8			4	13	4	11			23	13	4
	8			21			11			40		

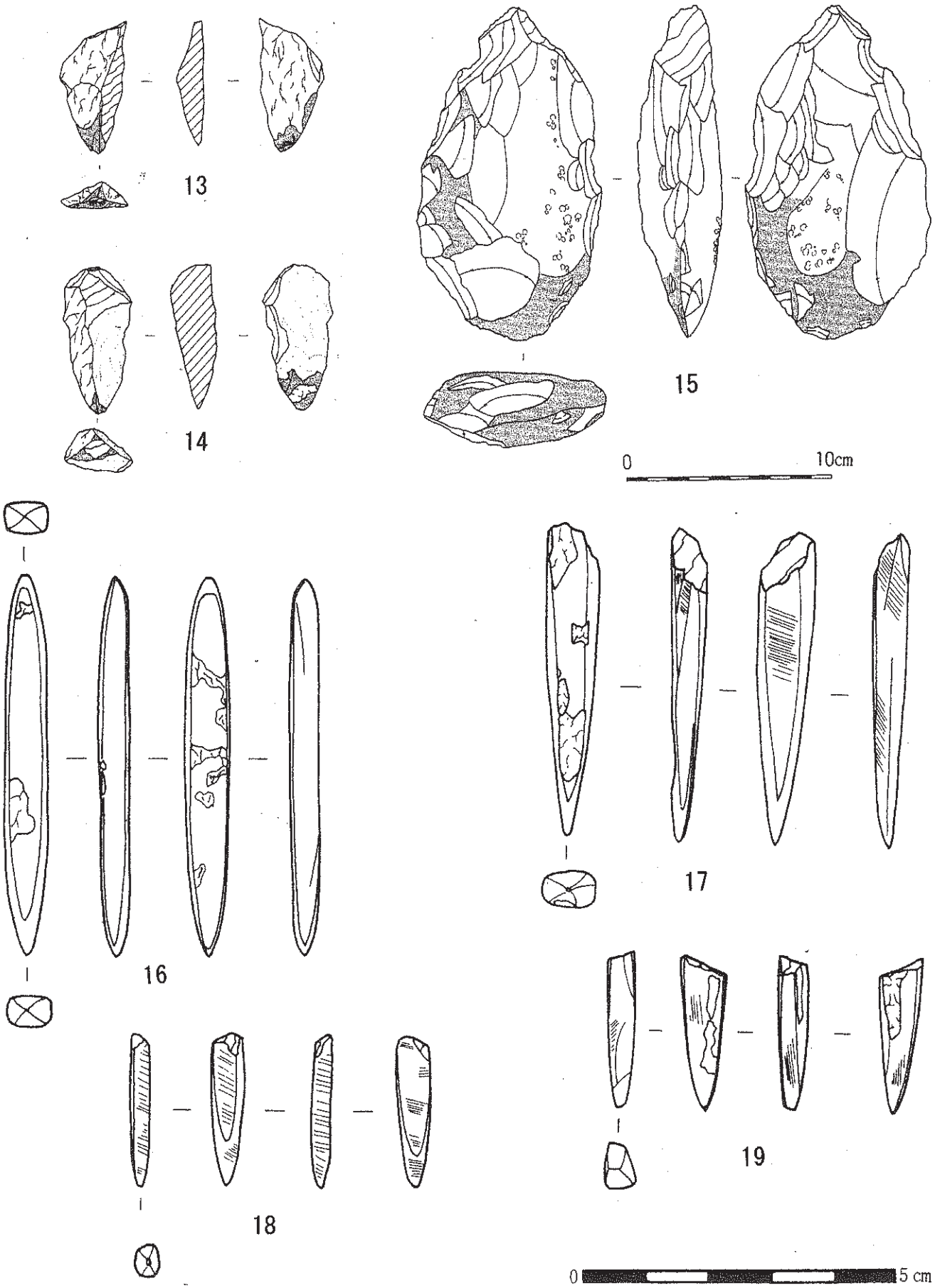
注．模式図は典型的なものを模式的に図化した。また、明確なものを分類の対象とした



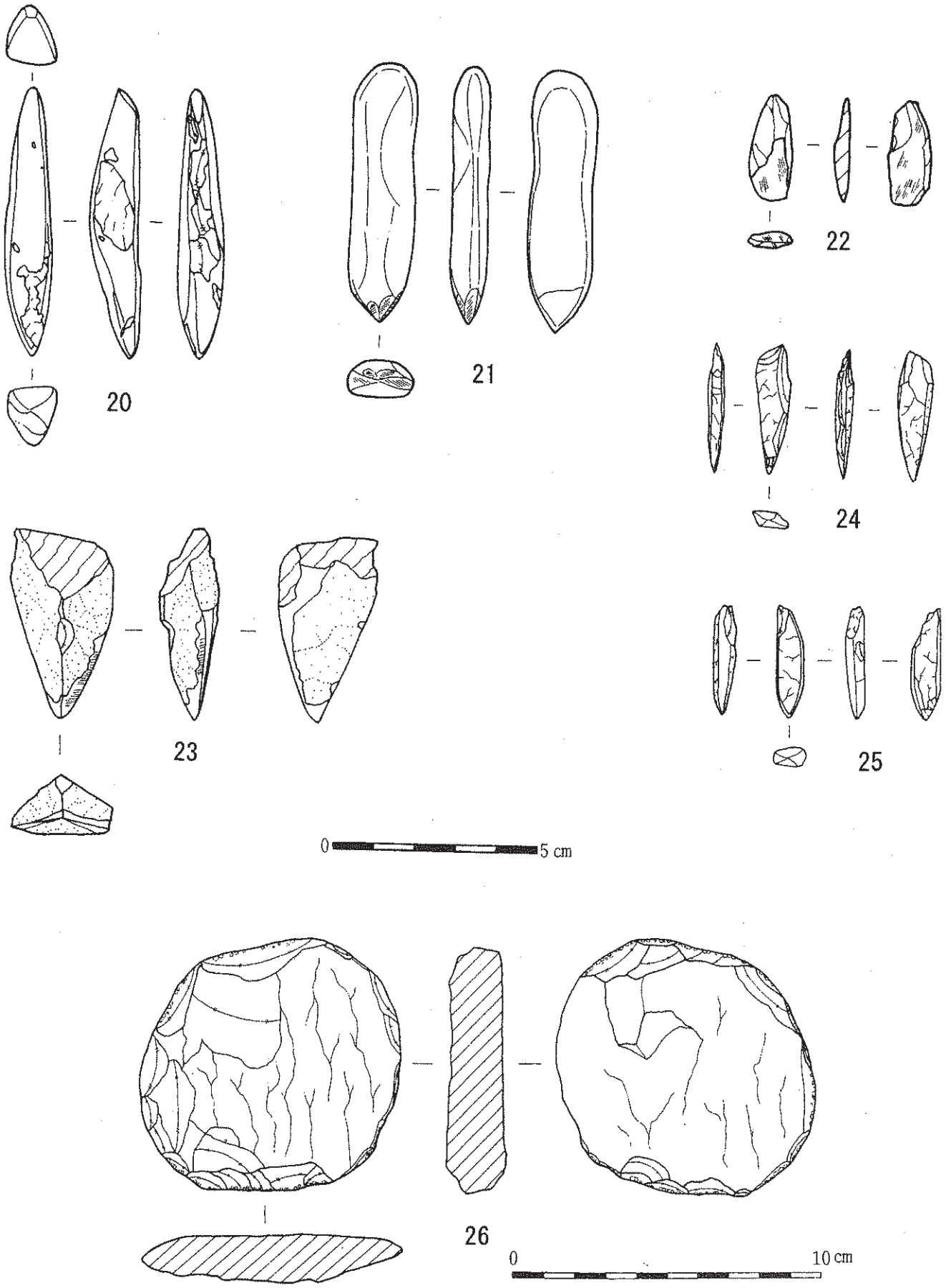
第６図　石斧（第Ⅰ群中型：１・２、第Ⅱ群小型：３、第Ⅱ群中型：４、
第Ⅱ群中型：５・６）



第７図　石斧（第Ⅱ群中型：７・８、第Ⅲ群小型：９～12）



第８図　石斧（第Ⅳ群小型：13・14）、石核石器：15、尖頭器：16～18、
　　鑿状利器：19



第９図　鑿状利器：20・22、石錐：21・23～25、円盤形石器：26

今のところ石製利器は、八重山・与那国地域で多く認められるようであり、地域的特徴かと想定される。これに近似する例が台湾の芝山岩文化期（註 19）にみられるようである。

（3）骨・牙製品（第 10 図～第 12 図）

下田原式土器が出土する石垣島の大田原遺跡（註 11・14）やピュウツタ遺跡（註 20）と比較して、下田原貝塚の骨製品および牙製品の種類や出土量は圧倒的に多い。

骨・牙製品は、総数で 72 点が出土している。用途別に種類を記すと実用品：骨針 19 点（約 26.3％）・骨錐 12 点（約 16.6％）・牙製尖状（イノシシ）製品 4 点（約 5.5％）・ノミ状製品（イノシシ・サカナ）7 点（約 9.7％）。実用品か装身具：サメ歯製品 20 点（約 27.7％）。装身具：猪牙製品 2 点（約 2.7％）・有孔犬牙製品 1 点（約 1.3％）・有孔椎骨（サメ科）製品 4 点（約 5.5％）・有孔顎骨（ウツボ科）製品 1 点（約 1.3％）。用途不明：牙状有溝（サカナ）製品 1 点（約 1.3％）・鯨骨製品 1 点（約 1.3％）に分類ができる。以下に骨・牙製品の中で注目される製品を取り上げる。

A）牙製尖状（イノシシ）製品：当該製品は 4 点（第 10 図 1 ～ 4）が出土している。イノシシの牙を縦割りにしナイフ状に加工したもの（同図 1）や牙の一部を削り出して先端を尖らせて錐状に加工したもの（同図 2・3）、そして、縦割りされた牙のエナメル質の側面に刃を付けたもの（同図 4）である。

B）ノミ状製品（イノシシ・サカナ）：当該製品 7 点の中で、イノシシの牙製品（同図 5 ～ 9）は、刃を牙の先端部分、若しくは内側のエナメル質部分に刃を付ける。

以上の牙製尖状（イノシシ）製品とノミ状製品（イノシシ利用）は、ナイフや木などを加工する際の工具としての利用が想定される。

C）サメ歯製品の 20 点は、製作過程などにおいて、A ～ D までの 4 タイプに大別した。なお、C・D タイプについては、a・b の二種類に細分した。

A：製作途中のものを主とするもので研磨などの加工を施すもの（アオザメを主として利用）。（第 11 図 12 ～ 14）。

B：歯冠・歯根部に全体的に研磨を施して仕上げるもの（アオザメを主として利用。同図 15）。

C：歯冠と歯根部の間（歯頸部）に孔を穿つもので、a・b の二つに細分した（メジロザメ科を利用）。

Ca：一孔穿つもの（第 11 図 16）。

Cb：二孔穿つもの（同図 17・18）。

D：歯冠・歯根部の側面を擦り落として、側面および両面に研磨を施すもので、孔の有無で a・b の二つに細分した（メジロザメ科を利用）。

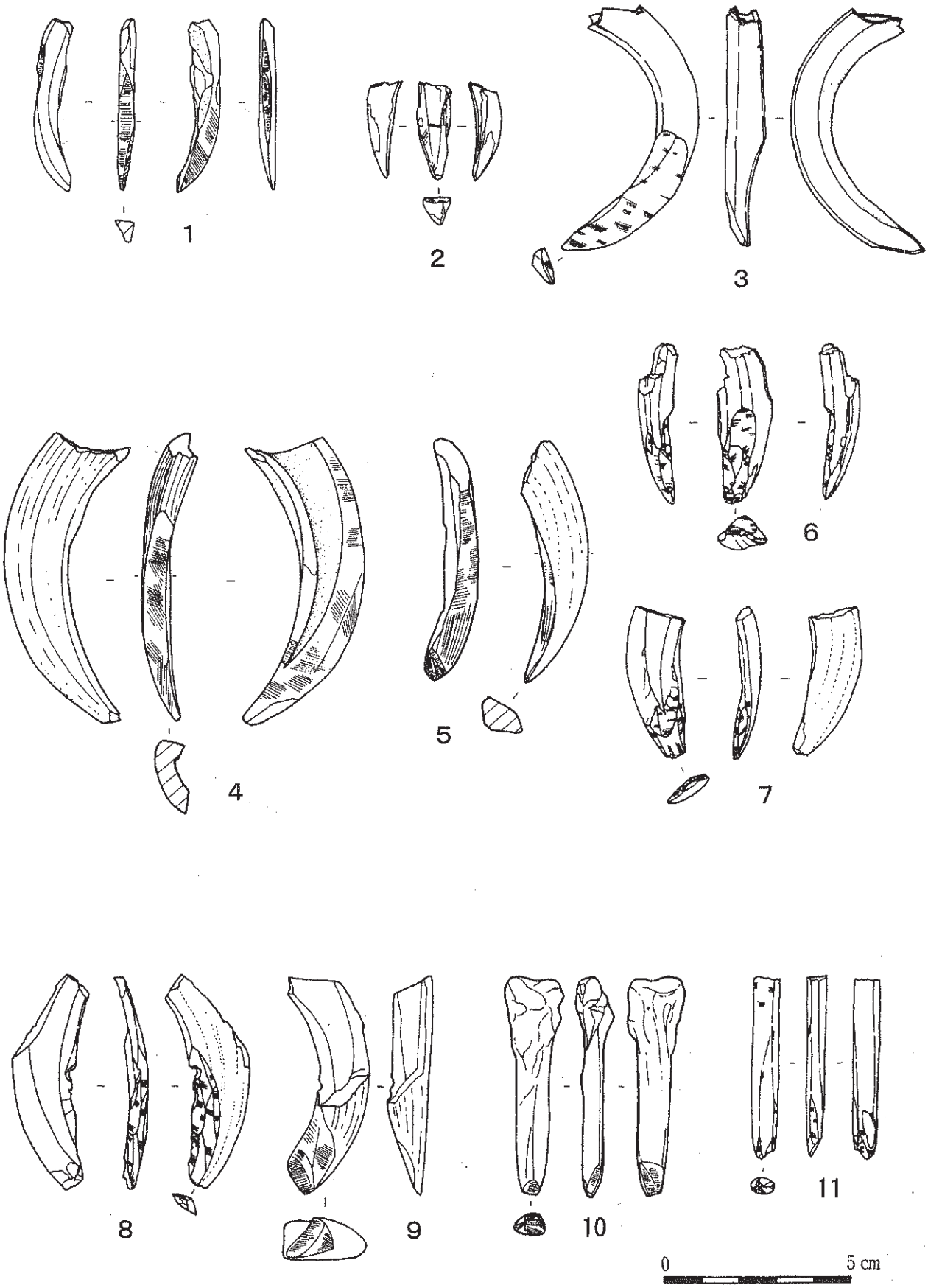
Da：孔を穿ったもの（同図 19）。

Db：孔が無いもの（同図 20）。

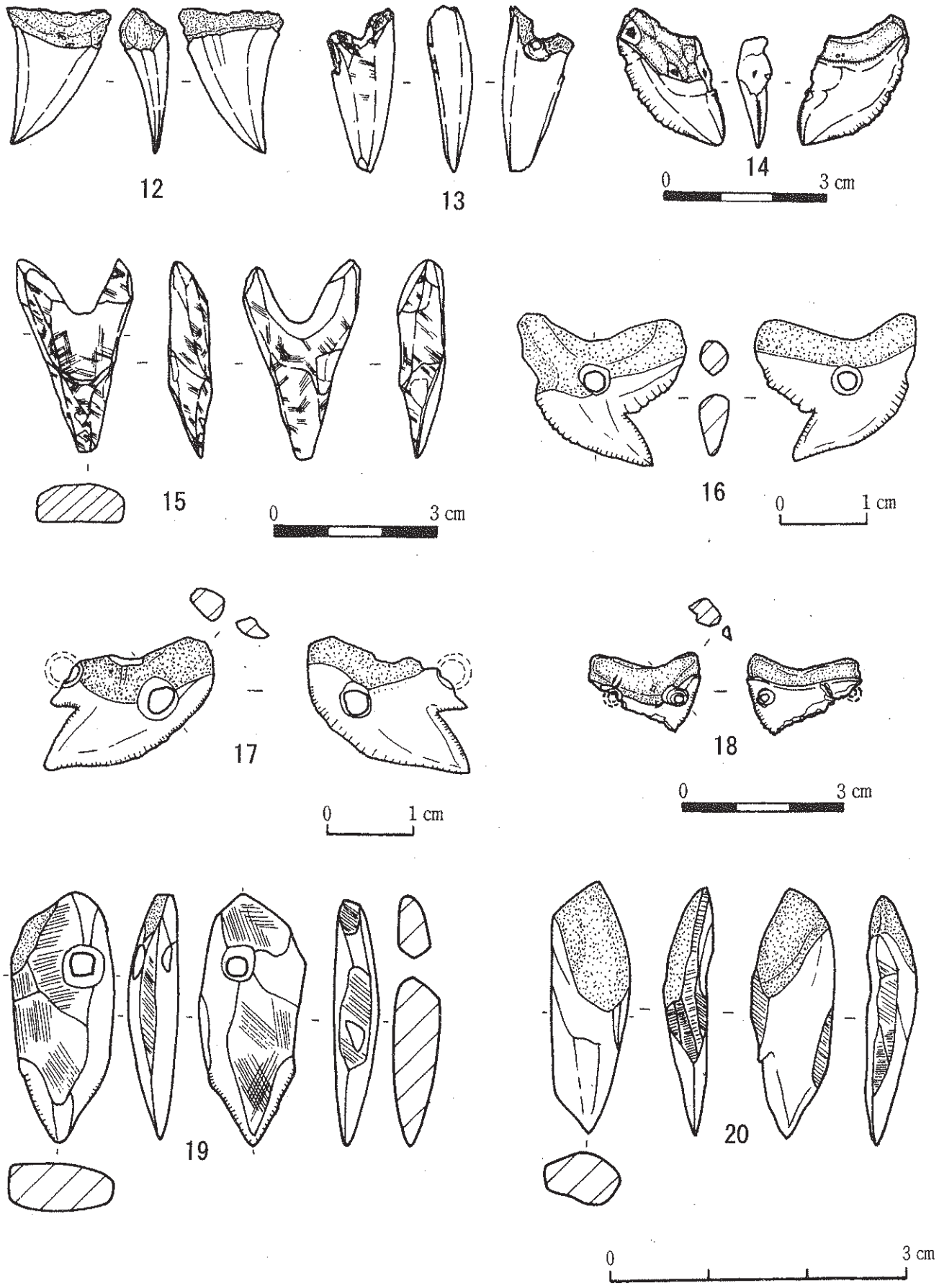
以上のサメ歯製品で、B タイプ（同図 15）は、県内で他に報告例がなくその用途は明確にし得ないが、形状などから鏃の可能性が極めて高いものと推察される。次に C タイプ（垂飾品）の中には、破損等によって再利用され D タイプ（利器）となったものもが確認されている。サメ歯製品の C・D タイプの類例は、無土器期の与那国島トゥグル浜遺跡（註 17）で出土している。

サメ歯製品は従来、装身具的な要素を持つものと理解されていたが、第 11 図 19・20 のような利器（刃先が斜めとなった片刃の彫刻刀の様な形）が確認された事は重要な発見であった。当該製品（同図 19・20）は、刃先の利用頻度の高い小型ナイフ（刃の付け方が棒状の工具の先端に着装、或いは固定されたデザイン用のカッターナイフと類似するものとみられる）として使用されたものと考えている。

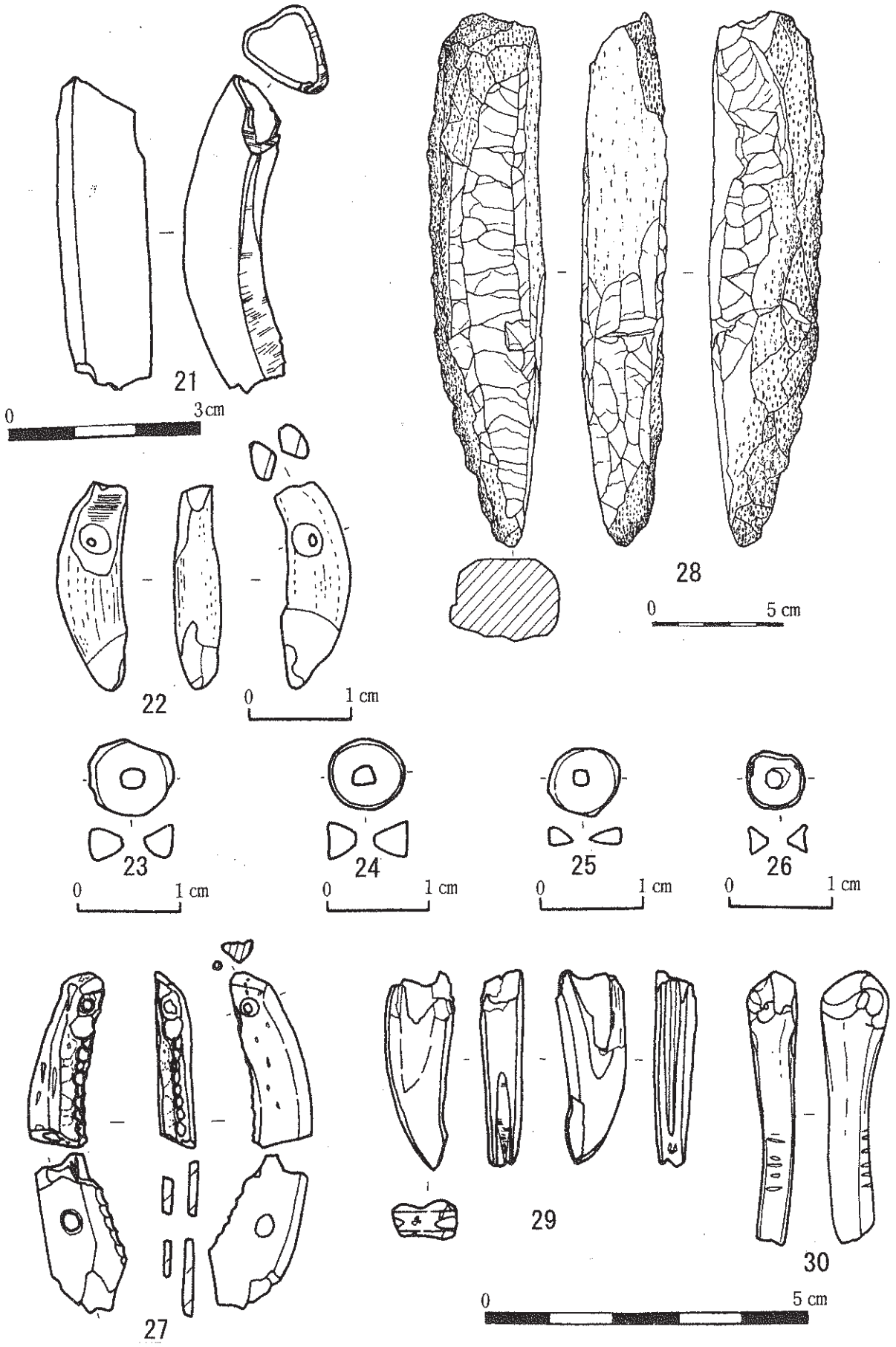
下田原貝塚のサメ歯製品の C タイプ（第 11 図 16 ～ 18）は、装身品として考えられるが、このタイプは、ポリネシアなどの島々では、武器（木製の槍や棍棒の周縁部に溝を掘り、溝の中に孔の空いたサメ歯を並べて埋め込んで組紐などで緊縛し固定する。或いは、手にはめて打撃部分にサメ歯を嵌め込んで刃物や棘（トゲ）の代わりにサメ歯を付けたナックル・ダスターと称されるものもある）や小型のナイフとしての日常使用が考えられている（註 21）。



第10図　骨・牙製品
牙製尖状（イノシシ）製品：１～４、ノミ状（イノシシ牙）
製品：５～９、骨製ノミ（イノシシ腓骨利用）：10・11



第11図　サメ歯製品　Aタイプ：12～14、Bタイプ：15、Caタイプ：16、Cbタイプ：17・18、Dbタイプ：20



第12図　イノシシ牙製品：21、有孔イヌ牙製品：22、
サメ有孔椎骨製品：23～26、ウツボ有孔顎骨製品：27、
用途不明：28（クジラ）・29（魚骨）・30（イノシシ）

県内から出土するサメ歯製品については、新里貴之・上村俊雄の両氏の研究があり、装飾品やペンダント、鏃など以外に、その機能を意味として魔除けや邪気払いなどの護符的要素や呪術的な要素として「サメの威を身につける」（註 22）という想定がなされている。

D）有孔犬牙製品：イヌの歯を利用した１点（第 12 図 22）は、先島（宮古・八重山）では他に出土例がなく、類例はフィリピンのイフガオ族や台湾のアミ族の複式耳飾に求めることができる（註 23）。

（４）貝製品（第 13 図～第 17 図）

貝製品は、総数で 200 点が出土している。内訳は、実用品｛a. スイジガイ・クモガイ製利器 13 点〔約 6.5％〕、ｂ．ヤコウガイの蓋製貝刃 22 点〔約 11％〕、ｃ．シレナシジミ製貝刃２点〔約１％〕、ｄ．シレナシジミ製利器１点〔約１％〕、e. 貝匙（シレナシジミ製８点・ホラガイ製３点・ゴホウラ製１点・イモガイ科製２点・オオベッコウカサガイ製１点、タカラガイ製１点）17 点〔約 8.5％〕：実用品合計 55 点（約 27.5％）｝・装飾品｛f. タカラガイ科製垂飾品７点〔約 3.5％〕、ｇ．イモガイ科製装飾品 24 点〔約 12％〕、h. その他巻貝製装飾品 59 点〔約 29.5％〕：装飾品合計 90 点（約 45％）｝・用途不明｛i. 二枚貝製有孔製品〔シレナシジミ製３点（約 1.5％）、シャコガイ科２点（約１％）、リュウキュウサルボウ 50 点（約 25％）〕：用途不明合計 55 点（約 27.5％）｝であった。

以上の中から特徴的な貝製品を挙げる。

A）スイジガイ・クモガイ製利器：

スイジガイ製の利器（第 13 図中１～６、第 14 図７～９）は 12 点が出土していて、スイジガイ製利器の管状突起六カ所の利用の在り方（第 13 図の「スイジガイ製利器の突起番号」参照）で、管状突起①を利用するもの９点（ポイント３点、附刃４点、ポイントか附刃か不明２点）、管状突起②が２点（附刃２点）、管状突起③が１点（附刃１点）が確認されている。

クモガイ製利器（第 14 図 10）は１点のみ得られているが、その利用箇所は管状突起①・③・⑦の三カ所に刃を付けている。スイジガイ製利器の用途は、漁具（ポイント）とするもと木工用具など（丸ノミ・平ノミ）が想定されている（註 24）。

B）ヤコウガイの蓋製貝刃：

ヤコウガイの蓋の縁辺部を打ち欠いて刃を付けた資料が 22 点出土している。

蓋の縁辺部への附刃についての分類は、トゥグル浜遺跡（註 17）のⅠ類～Ⅶ類までの７分類があり、この基準に準じて下田原貝塚出土の新資料を追加（Ⅷ類・Ⅸ類）する形でおこなった。Ⅰ類～Ⅸ類までの９分類とし、その代表的なものを抜き出して図示した。

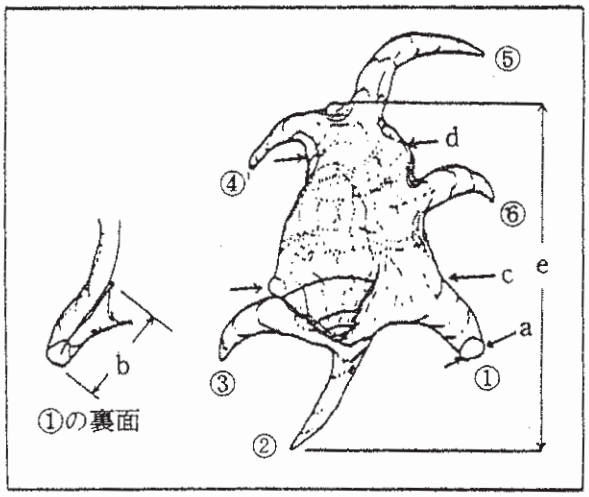
Ⅰ：下半縁辺加工型（第 14 図 11 ～ 13）。
Ⅱ：右辺・下辺加工型。
Ⅲ：下辺加工型（同図 14・15）。
Ⅳ：下半加工型。
Ⅴ：三辺（右・左・下）加工型（同図 16 ～ 19）。
Ⅵ：三角形型（同図 20・21）。
Ⅶ：右欠・下辺加工型。
Ⅷ：半欠・右辺・下辺加工型（同図 22）。
Ⅸ：右辺加工型（同図 23）。

以上の９分類で、トゥグル浜遺跡と下田原貝塚で共通するタイプは、Ⅰ類～Ⅵ類まで、Ⅶ類以降は下田原貝塚からは出土していない。

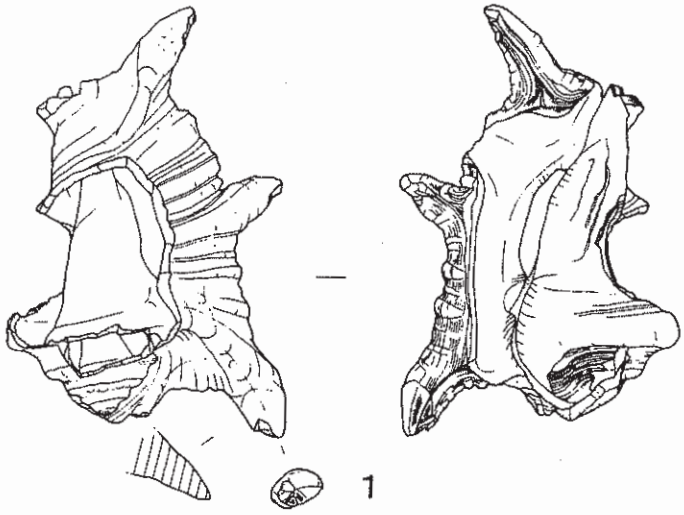
用途については、国分直一氏は穂摘具（註 1）や新田重清氏の魚調理具（註 25）などの説があるが、現時点では穂摘具の可能性は極めて低く、貝類採集や魚の鱗剥ぎなどの可能性が高いようである。

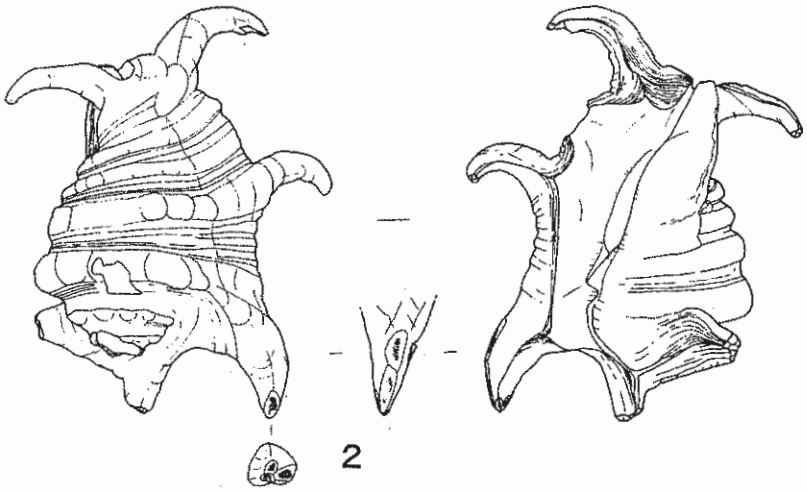
B）巻貝科製の装飾品（タカラガイ科製垂飾品・イモガイ科製装飾品・小型の巻貝科製装飾品）

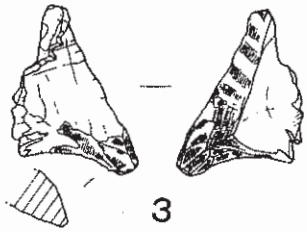
巻貝を利用した装飾品として、タカラガイ科製垂飾品７点・イモガイ科製装飾品 24 点（第 16 図 28 ～ 45）・その他小型の巻貝製装飾品 59 点（第 17 図 46 ～ 57）の三種類 90 点が得られている。

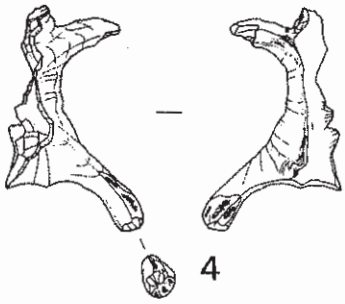


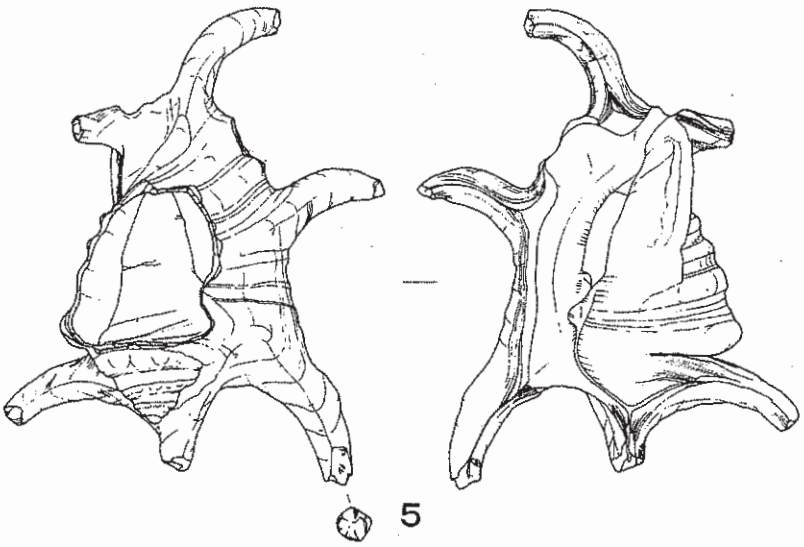
スイジガイ製利器の突起番号
計測位置（上原静原図『南島表６』第７号1981年より）

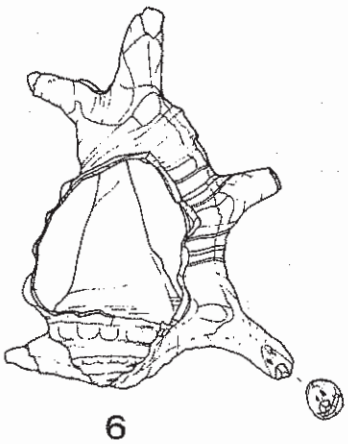






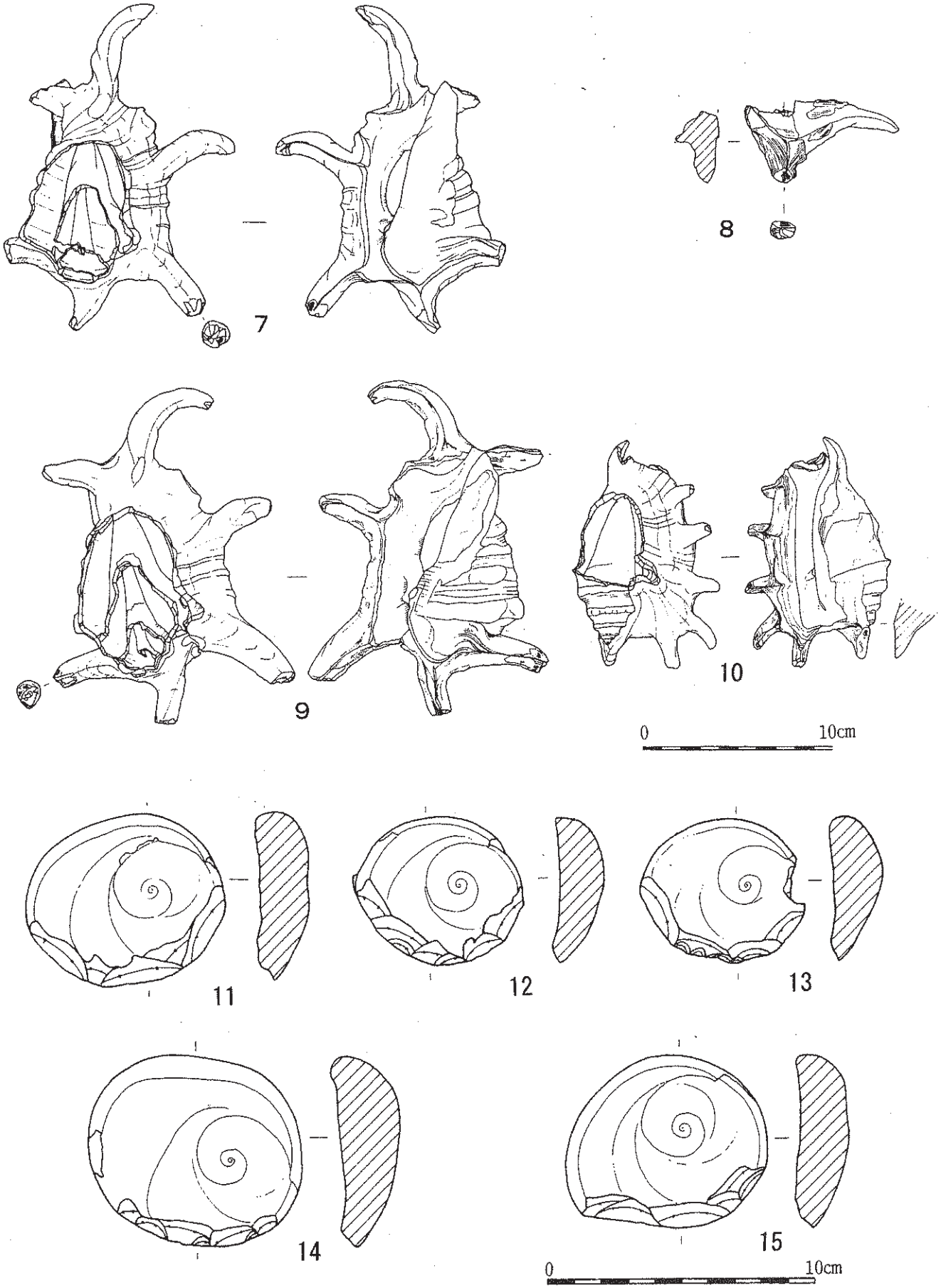




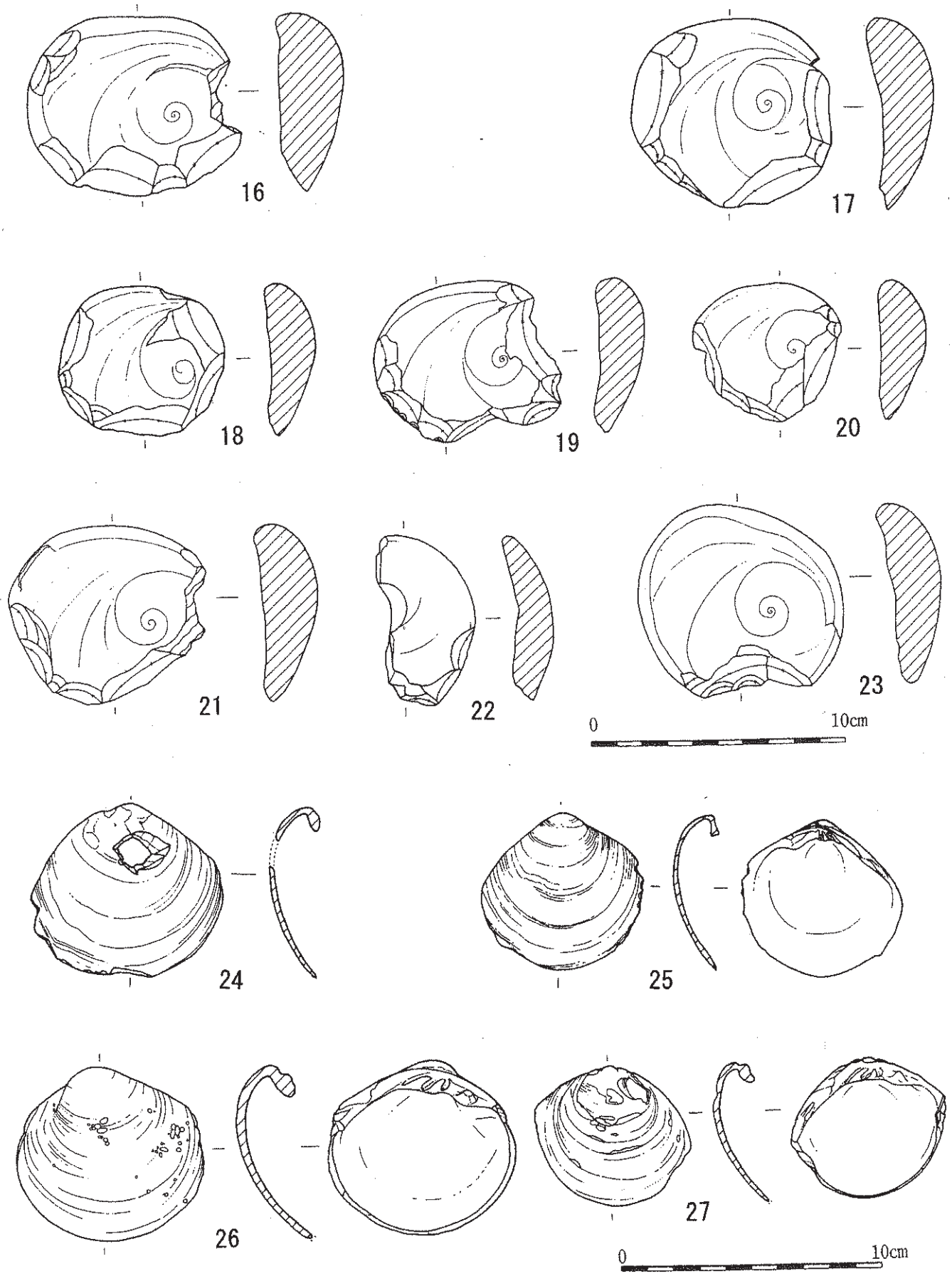


0　10cm

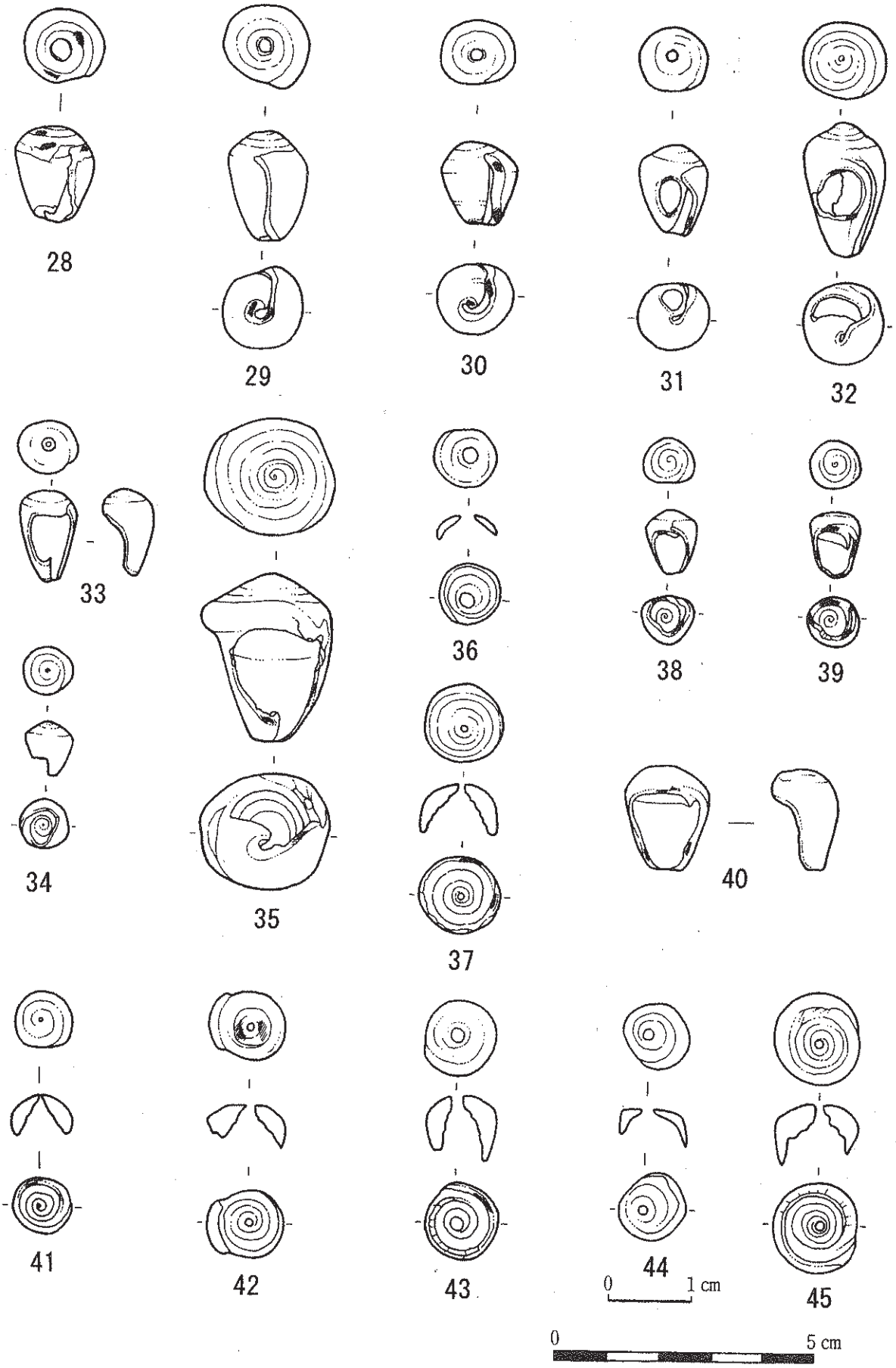
第13図　スイジガイ製利器：１～６（ポイント：１・２、附刃：３～６）



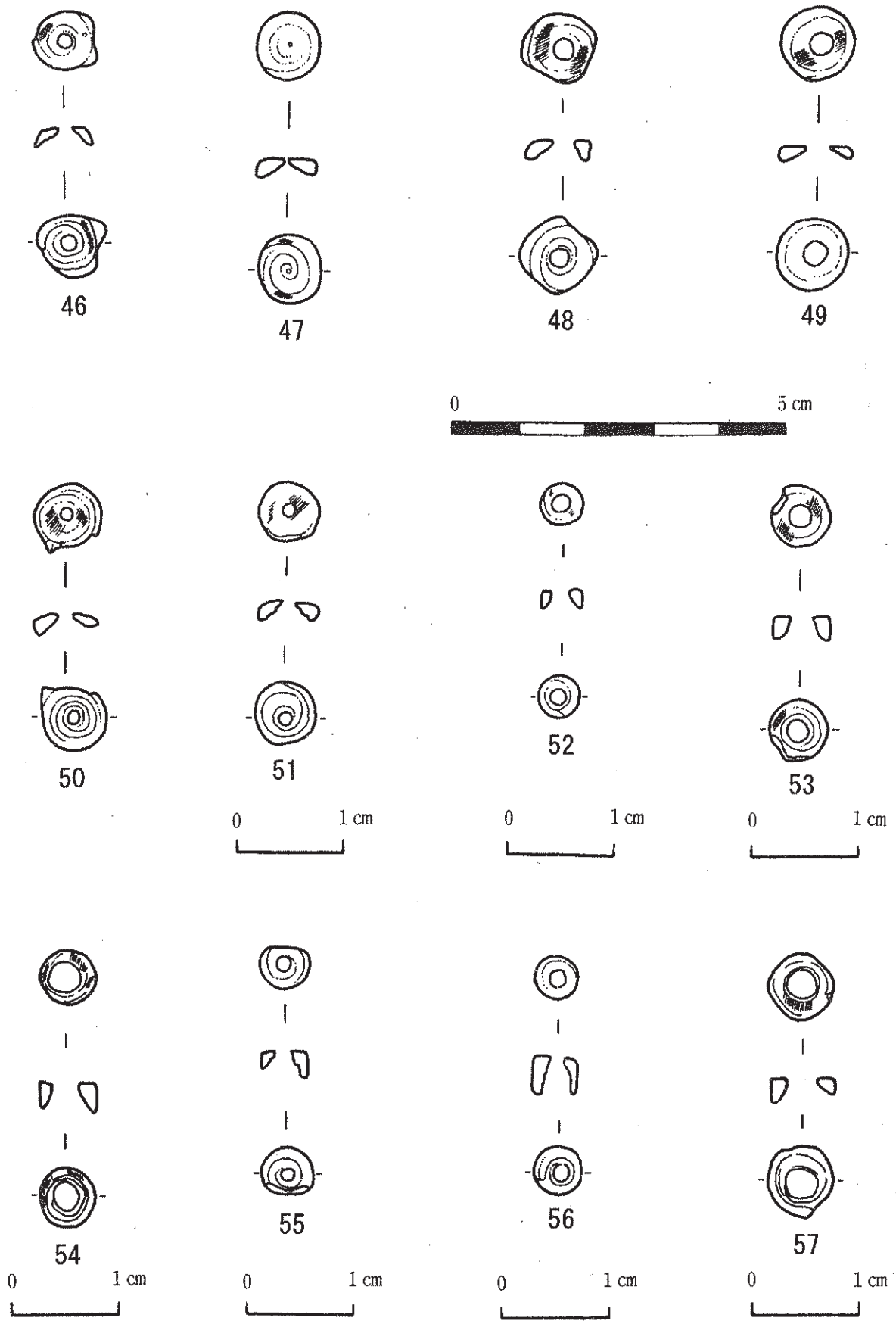
第14図　スイジガイ製利器（附刃：７～９）、クモガイ製利器：10、
ヤコウガイの蓋製貝刃：Ⅰ類（11～13）・Ⅲ類（14・15）



第15図　ヤコウガイの蓋製貝刃：Ⅴ類（16～19）・Ⅵ類（20・21）・Ⅷ類（22）・Ⅸ類（23）、シレナシジミ製貝製品（貝刃24・25、貝匙26・27）



第16図　イモガイ科製装飾品：28～45



第 17 図　小型巻貝製装飾品：46 ～ 57

巻貝製の装飾品は、貝製品の全出土量の内、半分近くの45％を占めている。小型の巻貝製装飾品は、手や腕、そして首などに着装していたものと考えられている。

4．調査の成果

調査成果については、昭和61（1986）年3月に刊行された発掘調査報告書（註4）より引用し抜粋したが、石材の供給地については、若干の補足として私見を述べる。

昭和58～60（1983～1985）年度の三ヵ年間に亘って実施された範囲確認調査の結果、県指定史跡下田原貝塚は、指定面積の約4倍の範囲に広がる広大な遺跡であることが確認された。

下田原貝塚の木炭とシャコガイを利用した放射性炭素年代測定の結果は、以下のとおりであった。

シー58 第Ⅲ層（貝）　3660±70ｙB・P（3550±65yB・P）

シー58 第Ⅲ層（木炭）　3740±85ｙB・P（3630±80yB・P）

下田原貝塚が、無土器の大泊浜貝塚より古いことが確認された。しかも間層を挟んでいることで、時間差もあることが確認された。

遺構では、柱穴が多く検出されたが、方形や円形などの規格性のある住居プランは確認できなかったが、簡素な建物（住居）であった可能性も考えられている。また、炉跡や柱穴などが平坦面から検出されていることと竪穴が見られないことから、平地式の建物であったと考えられる。

遺跡の北側を走る溝状遺構は、排水溝としての機能は十分に果たし得ると考えられるが、住居地域と外部とを区別するための区画の溝（溝の中にミズイモなどの根栽植物を植えた可能性もある。）の可能性もある。今後の類例発見に期待したい。

遺物では、大田原貝塚（註11）や仲間第二貝塚（註3）で、ほとんど検出されていない骨製品、貝製品が豊富であることが注目される。下田原期の文化は土器や石器だけの文化ではなく、かなり進んだ骨器・貝器の文化でもあったことが確認された。また、石器でも大田原遺跡や仲間第二貝塚では石斧、敲石、磨石などがほとんどであるのに対して、本遺跡では、小型の尖頭器類がかなり出土していることも注目された。

このように、下田原期の遺跡間でも文化様相にいくらかの差異があり、その解明は今後の課題である。

下田原期を代表する遺物は土器であるが、下田原式土器は、沖縄本島や九州などの北の文化には見られない特異な土器である。器壁が部厚く、把手付きで内彎する浅鉢は、北の流れではなく、南方系（台湾、フィリピン、中国南部、東南アジア、南太平洋地域）の土器の流れをくむものとして考えられる。その祖型を見い出すことが最大の課題である。

なお、白保竿根田原洞穴遺跡からは、下田原式土器よりも古い土器（約8,500～9,500年前）が発見（註26）されているが、この土器の祖型も南方系（台湾、中国南部など）が考えられるところである。

食料残滓でイノシシが大量に出土しているのが注目される。金子浩昌氏によると1.5才以上が67.6％を占めていることから、「若し、イノシシの飼育という問題があったとすれば、1.5才未満の個体が最も多くなるのではないか」と所見を述べている。イノシシは現在、波照間島には棲息していないが、25km北にある西表島に多く棲息しているので西表島から運び込まれたものと理解される。

石器の石材について、西表島は砂岩質〔中新世（533万年前～2303万年前）の西表層は砂岩を主体に礫岩・シルト岩などを含む〕の石材が多く、その多くは石垣島から運ばれてきたものと理解されるところであるが、最近の岩石分布の調査（註27）によると緑色片岩等の変成岩〔古生代ペルム紀（2億5980万年前～2億9890年前）・中生代三畳紀（2億3700万年前～2億5190万年前）のトムル層を形成する岩石）が西表島東端部の野原崎や小浜島の大岳を含む北半で確認されている。チャート（トムル層とほぼ同時期の富崎層に含まれる）は、小浜島南東端のビルマ崎の西表層中の砂礫層に長径2cm前後の円礫として含まれるが、石器を製作するとなると小さな剥片石器程度であろう。安山岩〔新生代古第三紀始新世（3390万年前～5600年前）の宮良川層・野底層に含まれる〕は西表島の北東部、小浜島の南部に分布する。石器以外に、土器の混和剤となる石英は、トムル層の緑色片岩等に石英脈として数cmから10cmほどの厚さで形成され、その周辺の海岸や河床で長径5cm前後の礫が採集できるようである。

末尾ながら宮古・八重山諸島の先史時代の文化の解明については、これからである。今後の調査・研究の

手掛かりとなるのが、平成 22（2010）年・平成 24 ～ 28（2012 ～ 2016）年に沖縄県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査報告書（註 26・27）にある人骨のミトコンドリア DNA の分析結果である。同報告書によると調査区ＩのＤ４区Ｓ４層（ⅢＡ層相当）出土の下田原期の人骨（人骨番号 No.188。放射性炭素年代 3,970 ± 30 年前。）のミトコンドリア DNA ハプログループは「M7a」で、南方に起源を持つ。現代人における分布がほぼ日本列島内部に限られ、その中でも特に琉球列島集団に多い。M7a は大陸南部で誕生したと推定されている。この M7a と同じハプログループが C1 洞埋没本洞（調査区Ⅱ）の人骨番号 No. 6（放射性炭素年代 2,312 ± 58 年前。無土器期。）で確認されている。また、調査区ＩのＩ５区付近のⅣ層相当から採取された旧石器人骨２体（人骨番号 No.12 の放射性炭素年代は 20,160 ± 108 年前で DNA ハプログループが「B4e」、人骨番号 No.13 の放射性炭素年代は 20,761 ± 163 年前で、DNA ハプログループが「R」）から「B4」系統と「R」系統の二つのハプログループの存在を確認している。「B4」の系統は東南アジアや中国大陸南部に起源を持ち、環太平洋地域に広く分布する。海岸地域の台湾の先住民やフィリピンなど東南アジアの島嶼部集団に多く見られ、その起源が 40,000 年前以上前に遡るとされている。「R」は東南アジア、パプアニューギニアやオーストラリアなどに広く存在するなど、南方地域に起源を持つようである。「M7a」・「B4」・「R」のいずれもその起源は中国大陸南部や東南アジアにつながるグループが想定されているようである。

ところで、下田原貝塚から出土する半磨製・局部磨製の石斧の中には東南アジアのバクソン・ホアビニアンの両文化期から出土するものとの近似性を早から研究者（註 3）によって指摘されている。また、割竹型（ホッグ・バック型）の片刃石斧については、フィリピンの遺跡から出土するタイプの石斧と類似することをフィリピン国立博物館考古学者の Meichor L. Aguilera ,Jr. 氏（註 29）からご教示をいただいている。下田原貝塚出土の石斧の中には、その起源を東南アジアやフィリピンなどに求めることができるようである。

註文献

註１a. 上盛松英・金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文「下田原貝塚」発見 1954 年３月『沖縄文化財調査報告 1956 ～ 1962』沖縄県教育委員会監修 那覇出版社 昭和 53（1978）年７月。

b. 国分直一・金関丈夫・多和田真淳・永井昌文「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『水産大学校研究報告 人文科学篇』第９号 1964 年

註２. 註１-a. に収録。1958 年「指定文化財解説」に「下田原貝塚」1. 指定埋蔵文化財 2. 指定年月日 1956 年 10 月 19 日 3. 所在地 八重山竹富町波照間島 4. 管理者 竹富町 5. 指定理由 琉球縄文貝塚後期と平行する、・・・中略・・半裁竹管石斧（沖縄の児童が遊びに使うイッパーに全く似ている。金関丈夫 博士命名。）石鑿、屋根形石器等の工具的片刃石器が多く出土する。

註３. 滝口 宏 編『沖縄八重山』校倉書房 1960 年７月。

註４. 金武正紀・金城亀信ほか『下田原貝塚・大泊浜貝塚－第１・２・３次発掘調査報告－』沖縄県文化財調査報告書 第 74 集 沖縄県教育委員会 1986 年３月。

註５a. 琉球新報「古我地原出土品など指定 県有形文化財、考古資料は初」琉球新報社 2011 年 11 月 18 日 金曜日。

b. 沖縄タイムス「県有形文化財に５点 県教委 考古資料は初指定」沖縄タイム社 2011 年 11 月 18 日 金曜日。

c. 金城亀信「下田原貝塚」沖縄県有形文化財（考古資料）指定記念 古我地原貝塚・下田原貝塚出土品展関連講座 第 51 回文化講座 沖縄県立埋蔵文化財センター 平成 24（2012）年３月 10 日。

註６. 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」1956 年沖縄文化財調査報告　沖縄文化財調査報告 1956 ～ 1962』沖縄県教育委員会監修 那覇出版社 昭和 53（1978）年７月。

註７. Pearson,Richard「The Sequence in the Sakisima Islands」『Archaeology of Ryukyu Island』UNIVERSITYOF HAWAII PRESS　1969。

註８. 国分直一「南島の先史土器とその編年」『南島先史時代の研究』慶友社 1972 年。

註 9　a. 三島 格「外耳をもつ石臼」『奄美文化誌－南島の歴史と民俗－』西日本新聞 1974 年。
b. 三島 格「Ⅰ沖縄先島地方における無土器時代」「Ⅱ 南島考古学資料（一）」『南島考古学－南島・大和 および華南・台湾－』南島文化叢書 10 第一書房 1989 年。
註 10. 當眞嗣一「八重山の遺跡とその文化」『八重山文化』第 4 号 東京・八重山文化研究会 1976 年。
註 11. 金武正紀・阿利直治ほか『石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告－大田原遺跡・神田貝塚・ヤマバレー遺跡 附編 平地原遺跡表面採集遺物－』沖縄県文化財調査報告書 第 30 集 沖縄県教育委員会 1980 年 3 月。
註 12a. 安里嗣淳「南琉球先史文化圏における無土器新石器期の位置」『琉中歴史関係論文集』第二回琉中歴史関係国際学術会議報告 琉中歴史関係国際会議実行委員会 1989 年。
b. 安里嗣淳「南琉球の原始時代－シャコガイ製貝斧とフィリピン－」『海洋文化論』環中国海の民俗と文化 第 1 巻　凱風社 1993 年。
註 13a. 金武正紀「考古学から見た宮古・八重山の歴史」第 175 回 博物館文化講座レジメ 沖縄県立博物館 1989 年。
b. 金武正紀「先島の時代区分」『琉球史フォーラム－考古学の時代区分－』名護市史セミナー 名護市教育委員会 1991 年。
c. 金武世紀「土器→無土器→土器 －八重山考古学編年思案－」『南島考古』第 14 号 沖縄考古学会 1994 年。
註 14. 石垣市教育委員会「大田原遺跡」石垣市文化財調査報告書第 4 号 1982 年。
註 15. 赤沢 威「先史学における解釈」『日本の旧石器文化』第 5 巻 雄山閣 1976 年。
註 16. F. LAND JOCANO『Philippine Prehistory』1975。
註 17. 安里嗣淳ほか「与那国島トゥグル浜遺跡」沖縄県文化財調査報告書 第 66 集 沖縄県教育委員会 1985 年 3 月。
註 18a. 沖縄県教育委員会「仲筋ピューシタ河口遺跡」『石垣島の遺跡』1979 年。
b. 石垣市教育委員会「ピューシタ河口貝塚」『石垣市の文化財』1991 年。
※「仲筋ピューシタ河口遺跡」と「ピューシタ河口貝塚」は、無土器期の遺跡。
註 19. 黄土強『台北芝山岩遺跡発掘報告』台湾 台北市文献委員会 1973 年。
註 20. 島袋綾野・下地 傑・阿利直治「ピュウツタ遺跡」『名蔵貝塚ほか発掘調査報告 名蔵貝塚・ピュウツタ遺跡発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書第 22 号 石垣市教育委員会 1997 年 3 月。
註 21. 篠遠喜彦「連載第 5 回 ポリネシア遺物控 鮫の歯を使用した遺物」『えとのす』第 10 号 新日本教育図書 1978 年 6 月。
註 22. 新里貴之・上村俊雄「南西諸島に分布するサメ歯製品及びその模造品について」『南島考古』第 17 号 沖縄考古学会 1998 年 3 月。
註 23a. 三島 格「九州および南島出土の鮫歯製垂飾について」『日本民族文化とその周辺 考古編』国分直一博士古希記念論集 新二品教育図書 1980 年。
b. 鹿野忠雄「アミ族のクラッパーベルと其の起源」東南亜細亜民俗学先史研究 矢島書房 1946 年。
註 24. 上原 静「いわゆる南島出土の貝製利器について」『南島考古』第 7 号 沖縄考古学会 1981 年 12 月。
註 25. 新田重清ほか「渡喜仁浜原貝塚調査報告書」今帰仁村教育委員会 1977 年。
註 26. 仲座久宜・篠田謙一ほか『白保竿根田原洞穴遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター 2017 年 3 月。
註 27. 仲座久宜・米田 穣・篠田謙一・山崎真治・仲里 健・大堀晧平ほか『白保竿根田原洞穴遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター 2013 年 3 月。
註 28. 金城亀信「下田原貝塚」沖縄県有形文化財（考古資料）指定記念 古我地原貝塚・下田原貝塚出土品展関連講座 第 51 回文化講座 沖縄県立埋蔵文化財センター 平成 24（2012）年 3 月 10 日。
註 29. 1990 年に国士舘大学教養部専任講師小川英之（文化人類学）と共に来沖した際に割竹型石斧について質問したところ。フィリピンでも同タイプの石斧がある事を知った。

参考文献

◎ 金武正紀・島袋綾野『研究史－八重山考古学のあゆみ』石垣市史考古ビジュアル版　第１巻 石垣市総務部市史編集課 石垣市 2007 年３月。

◎ 金武正紀・島袋綾野『下田原期のくらし』石垣市史考古ビジュアル版　第２巻 石垣市総務部市史編集課 石垣市 2008 年３月。

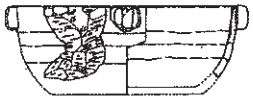
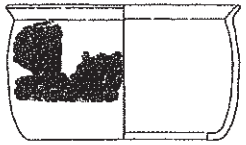
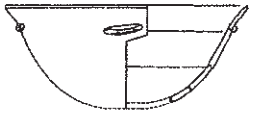
◎ 篠田謙一『日本人になった祖先たち -DNA から解明するその多元的構造 -』NHK ブックス〔1078〕NHK 出版 2013（平成 25）年６月５日 第 13 刷発行。

◎ 沖縄県立埋蔵文化財センター「緊急公開 白保竿根田原洞穴遺跡 １～４号人骨」開催期間 2017 年５月 20 日（土）～ 28 日（日）。公開された人骨年代と主な特徴：①白保１号人骨（成人・男性。推定身長 158.6cm。）〔年代〕19,786 ± 57BP（未較正）23,938 ～ 23,709CalBP（較正）。②白保２号人骨（成人・男性。推定身長 164.9cm。日常的な潜水による外耳道骨腫。）〔年代〕18,506 ± 79BP（未較正）22,473 ～ 22,314CalBP（較正）。③白保３号人骨（成人・男性。20 代前半。）〔年代〕16,573 ± 51BP（未較正）20,187 ～ 19,791CalBP（較正）。④白保４号人骨（成人・男性。推定身長 165.2cm。屈葬状態で風葬。）〔年代〕23,400 ± 64BP（未較正）27,685 ～ 27,519CalBP（較正）。

◎ 仲座久宜「白保竿根田原洞穴遺跡」『発掘調査速報 2017』沖縄県立埋蔵文化財センター 2017 年８月１日。

メモ

八重山考古学編年

	編　年		土　器	石斧・貝斧	陶磁器・開元通寶	立地・石垣	主な遺跡	八重山諸島の主な土器	備考
先史時代	下田原期	(参考) ^{14}C3970±95 ～ ^{14}C3580±65 (注1)	下田原式土器	石斧	無し	砂丘後背の微高地	下田原 仲間第二 大田原	下田原式土器	前期 (注3)
	(未発見の空白期)								
	無土器期	(参考) ^{14}C1770±70 ～ 12 世紀前半	無し	石斧 貝斧	開元通寶 中国陶磁器（北宋末）が僅かに出土 徳之島カムィ窯須恵器	砂丘	仲間第一 大泊浜 崎枝赤崎	土器が出土しない。 焼石による調理(注2)	後期 (注3)
歴（原）史時代	新里村期	12 世紀 ～ 13 世紀	新里村式土器 ビロースク式土器	石斧僅か	中国陶磁器（北宋末～南宋）が少量出土	丘陵上や平野 石垣無し	新里村東 ビロースクの2・3層	 新里村式土器  ビロースク式土器	グスク時代相当期
	中森期	13 世紀末 ～ 17 世紀初	中森式土器	無し	中国陶磁器（元～明）が大量出土	丘陵上や平野 石垣が登場	鳩間中森 新里村西	 中森式土器	
	パナリ期	17 世紀 ～ 19 世紀	パナリ焼	無し	湧田・壺屋陶器や八重山陶器が出土	近世の廃村や現村落	新城島	パナリ焼	近世

「八重山考古学編年」：金武正紀・阿利直治・金城亀信の編年（第２次）「土器→無土器→土器 －八重山考古学編年試案－」『南島考古』第 14 号 沖縄考古学会（1994. 12. 20）に主な土器を追加し、加筆した。

（注１）　^{14}C：放射性炭素による年代測定法。放射性炭素の半減期は 5,730 年（放射性炭素が 1000 個存在したとすると、5,730 年後には半分の 500 個に数が減少する）。
放射性炭素の年代は 1950 年を基準にして半減期 5,568 年として測定される。

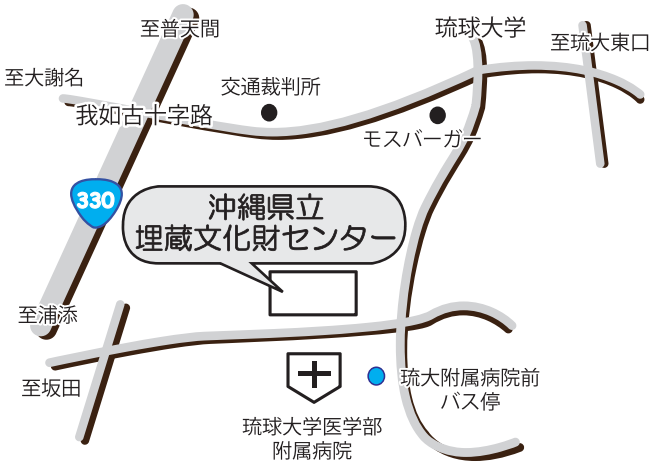
（注２）　石を集め火で熱し、熱された石の上に食材を置いて調理する方法。例：石焼イモ。現在でもオセアニアで、その調理方法が残っている。

（注３）　安里嗣淳「沖縄・先島の考古学」『月刊考古学ジャーナル』No. 284 ニュー・サイエンス社 1987 年。

企画展のお知らせ

沖縄の昔むかし展

平成 29 年 10/24(火) ～ 11/26(日)



交通案内

■沖縄自動車道西原ICより車で 10 分

■市外線バスターミナル発　那覇バス 97 番

首里駅発　那覇バス 94 番（平日のみ運行）

『琉大附属病院前』 下車徒歩 3 分

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7　TEL：098-835-8751

開所時間：午前 9 時～午後 5 時（入所は午後 4 時 30 分まで）

休 所 日：月曜日、国民の祝日（こどもの日、文化の日は開所）、年末年始、　※月曜が祝日の際は、翌火曜も休所